

岡山市教育委員会

醫王谷古墳・醫王谷遺跡 正誤表

頁	行・箇所	誤	正
43	醫王谷古墳出土土 器觀察表 7段目以 降の掲載番号	28、29、30、32、31、35 34、33、36、37、38、39 40、41、42、43、44、45 46、47、48、49、50、51	34、35、36、37、38、39 40、41、42、43、44、45 46、47、48、49、50、51 52、53、54、55、56、57

序

岡山市は、かつて吉備と呼ばれた地域の中核を占めています。そして古くから文化の花が開き、現在まで多くの文化財が残されてきました。いま私たちが生活する岡山市の姿は、この地に根付き、それら文化財を残してきた先人たちの歴史の延長にあるといえます。

いおうだに 醫王谷古墳・醫王谷遺跡は、圃場整備に伴って発掘調査されました。調査の結果、醫王谷古墳は石室の全長が8mに及ぶことが明らかとなり、また石室内から多量の鉄製品が出土しました。調査内容から、当地の富裕層の墳墓であることは間違いないと考えられます。また、石室内からは中世の鋳鉄鋸物の製作と関連する溶解炉や鋳型等が出土し、当地における鋸物師の活動の一端を知る資料を得ることができました。日近地域における埋蔵文化財の発掘調査は、今回が初めてであり、地元の皆様にとって、地域の歴史を知っていただける機会になったのではないかと思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際しまして貴重なご指導を頂きました発掘調査対策委員会の諸先生方、発掘調査にご理解・ご協力を頂きました地元の方々、ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 山根 文男

例　言

- 1 本書は農地等高度利用促進事業（圃場整備）に伴い、岡山市教育委員会文化財課が実施した、醫王谷古墳・醫王谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 醫王谷古墳・醫王谷遺跡は岡山市日近1777番地に所在する。
- 3 発掘調査は、2005年9月～11月に実施し、整理作業および報告書作成作業は2005年12月から2006年12月まで行った。
- 4 遺物の実測・トレースは山元尚子・西田和浩が行い、写真撮影は西田が行った。
- 5 本書に用いた高度地は標準海拔高度である。座標は平面直角座標第V系（世界測地系）を用いた。方位は磁北を用いている。
- 6 報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 7 第2図は国土地理院発行の1/50000地形図「東山内」「総社東部」を複製・合成し、さらに「改訂岡山県遺跡地図第6分冊岡山地区」の遺跡範囲と遺跡名を加筆・修正したものである。
- 8 本書の執筆・編集は西田が行った。
- 9 出土遺物・実測図・写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

凡　例

- 1 報告書掲載の遺物には、以下の略記号を用いている。
石器：S　金属製品：M
- 2 掲載遺物の縮尺は、以下の通りである。
土器・陶磁器・埴輪 (S=1/3)　　金属製品・石器 (S=1/2)　　鋳造関連遺物 (S=1/3)

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯と推移	4
第1節 調査の契機	4
第2節 経過と概要	5
第3節 日誌抄	7
第3章 醫王谷古墳	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
1 墳丘	8
2 横穴式石室	12
3 石室内遺物出土状況	12
4 遺物	14
第4章 醫王谷遺跡	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 遺構と遺物	30
第5章 まとめ	37
第1節 醫王谷古墳について	37
第2節 鋳造関連遺物について	39
遺物観察表	41
図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡位置図 (1/200000)	1	図17 須恵器2 (1/3)	22
図2 主要遺跡分布図 (1/25000)	3	図18 弥生土器・石器 (1/2・1/3)	23
図3 調査位置図 (1/2500)	5	図19 土師器甕 (1/3)	24
図4 醫王谷古墳・醫王谷遺跡全体図 (1/400)	6	図20 墓輪 (1/3)	24
図5 現地説明会風景	7	図21 土師質土器楕・皿 (1/3)	26
図6 墳丘平面図 (1/100)	9	図22 鍋・摺鉢・磁器 (1/3)	27
図7 墳丘断面図 (1/80)	10	図23 錄造関連遺物1 (1/3)	28
図8 横穴式石室実測図 (1/60)	11	図24 錄造関連遺物2 (1/3)	29
図9 石室内遺物出土状況図 (1/40)	12	図25 醫王谷遺跡上層遺構配置図 (1/200)	31
図10 器種別遺物出土状況図 (1/40)	13	図26 醫王谷遺跡下層遺構配置図 (1/200)	32
図11 金属製品1 (1/2)	15	図27 醫王谷遺跡土層断面図1 (1/80)	33
図12 金属製品2 (1/2)	16	図28 醫王谷遺跡土層断面図2 (1/80)	34
図13 金属製品3 (1/2)	17	図29 醫王谷遺跡土層断面図3 (1/80)	34
図14 金属製品4 (1/2)	18	図30 出土遺構 平面・断面図 (1/40)	35
図15 金属製品5 (1/2)	19	図31 醫王谷遺跡出土遺物 (1/3・1/2)	36
図16 須恵器1 (1/3)	21	図32 足守川上流域の後期古墳分布図 (1/50000)	
		図33 龍王塚古墳と醫王谷古墳の比較 (1/100)	

表 目 次

表1 醫王谷古墳出土金属器観察表	41	表3 醫王谷遺跡出土土器観察表	44
表2 醫王谷古墳出土土器観察表	42	表4 醫王谷古墳・醫王谷遺跡出土石器観察表	
			44

第1章 遺跡の位置と環境

醫王谷古墳・醫王谷遺跡の所在する日近は、岡山市の北西部、足守川の支流日近川下流両岸の平地にあたる。南に足守川流域の平野が広がり、北には準隆起平原である吉備高原の間に位置しており、その多くが山地・丘陵地によって占められている。醫王谷古墳・醫王谷遺跡は日近川の支流杉谷川北岸の丘陵斜面に位置する。古代は賀夜郡大井郷の一部であった。

日近周辺では旧石器・縄文時代の遺跡はこれまで確認されていない。南に下った足守地区の余町遺跡では縄文時代後期の土器片が採集され、足守深茂遺跡では縄文時代後期から晩期の遺物が出土している（岡山市教育委員会2002）。また、足守庄関連遺跡では発掘調査によって縄文時代晩期の突帯紋土器が出土した（草原1994）。

弥生時代になると、日近川と足守川の両岸に広がる平地および段丘上で、弥生土器が採集される散布地がいくつか確認されている。これらの遺跡は今まで調査されておらず、名称も不定のままであるが、今後発掘調査されることになれば、当地域の弥生時代の様相は徐々に明らかにされていくことであろう。

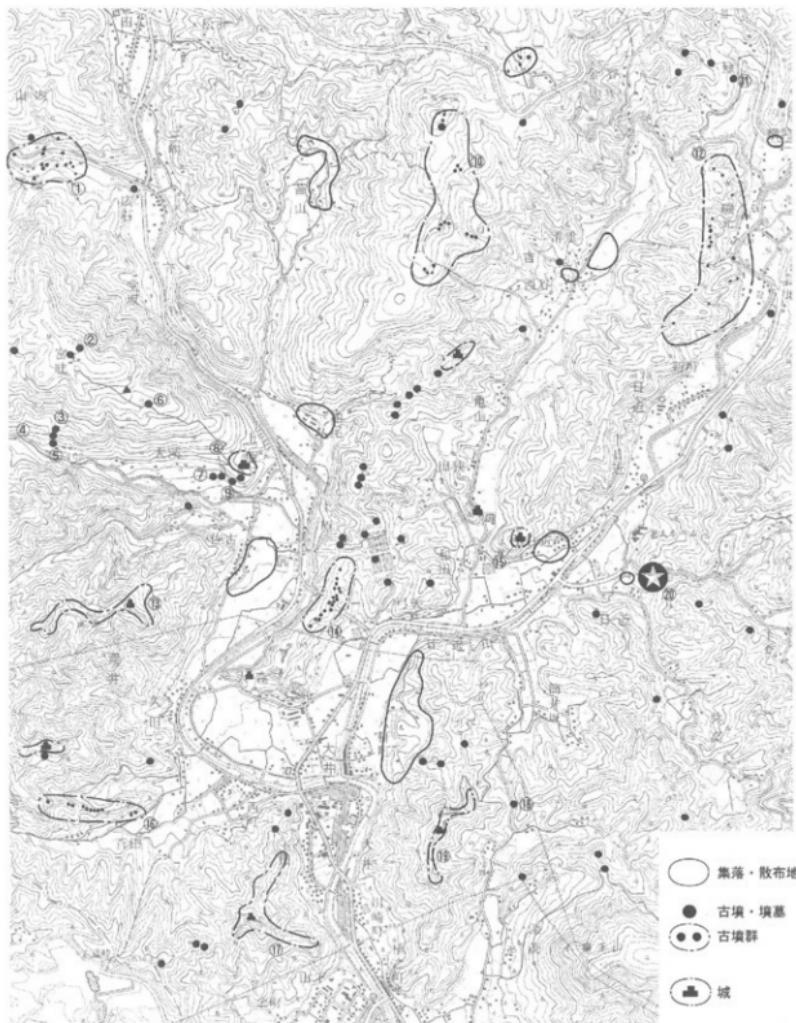
続く古墳時代は、調査例がないため内容は不明である。集落については、河川両岸に広がる平坦な土地を、主な居住地にしたと考えられる。一方、小規模なものが中心であるものの、古墳は数多く確認されている。山陵に多数の墳墓が築かれ、古墳群がいくつか形成されている。そのなかで、下高田古墳群では、全長44mの前方後円墳で後円部に2基の竪穴式石室を有する尾龍山古墳が築かれている。足守川流域の平野以北の山陵地域では、開発がそれほど及んでおらず、古墳の調査例はほとんどない。そのため、発掘による実態解明は十分とはいえないが、初期の横穴式石室とみられる宮の乱古墳、足守川上流域で最大を誇る栗井大塚をはじめ数多くの横穴式石室が確認されており、古墳時代を通して墳墓の造営が継続されていたのは間違いないだろう。栗井大塚古墳群では、県道拡幅工事にともなって2号墳と14号墳の発掘調査が実施されており、当地において数少ない調査例の一つとなっている（岡山県教育委員会1991）。

これより下流に位置し、足守川左岸に広がる三井谷周辺では、土石採取に伴って発掘調査が実施され、弥生時代後期末から古墳時代中期の様相が明らかにされつつある（草原1999・河田ほか2006）。

古代の遺跡も、調査例がなく様相は明らかではない。しかし、平城宮跡出土の木筒の中に、備中國賀夜郡大井郷と思われる「大井鍬十口」という記述がある。当時の大井郷では鉄が生産され、貢納されていましたことがうかがえる。喜応元年（1169）12月の神護寺領備中國足守莊絵図に「大井御庄堺藤木山」「大井御庄堺畏坂山」という記述があり、足守庄北側に大井庄が隣接し、日近も大井庄に含まれていたと考



図1 遺跡位置図



- 1:栗井大塚古墳群 2:メガ塚古墳 3:栗井南1号墳 4:栗井南2号墳 5:栗井南3号墳
 6:栗井南4号墳 7:栗井南5号墳 8:栗井南6号墳 9:栗井南7号墳 10:苔山古墳群 11:奥ノ谷古墳
 12:下高田古墳群 13:立石城跡 14:宮山古墳群 15:日近城跡 16:百田古墳群 17:宮路山城跡
 18:経塚弥生墳丘墓 19:鍛治山城跡 20:醫王谷遺跡群

図2 主要遺跡分布図 (S = 1/25000)

えられる。

戦国時代に入ると日近周辺は西進する織田氏の先鋒となった宇喜多氏と、それに対抗する毛利氏との境目地域となる。山城がいくつも造られており、鍛冶山城・宮路山城など当地域において中心となる城郭が築かれる。南の足守地域では「高松城の戦い」の前哨戦とされる「冠山城の戦い」が行われており、この戦闘に関連する遺跡の調査が近年岡山市教育委員会によって実施されている（草原1998・河田はか2006）。そして天正10年（1582）に高松城が落城した後は宇喜多秀家の領地となっている。江戸時代は木下家足守藩領となり、明治維新を迎える現在に至っている。

以上のように、日近の南に展開する足守平野とその周囲の丘陵地は、開発に起因するものが多いとはいえた發掘調査による地域史の解明が進みつつある。反対に、日近とその周辺はまだ調査が及んでおらず、今回行った醫王谷古墳・醫王谷遺跡の發掘は当地における数少ない調査といえる。

参考文献

- 河田健司2006『南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群』岡山市教育委員会
草原孝典1994『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
草原孝典1995『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会
草原孝典1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
草原孝典1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会
高橋伸二2001『足守藩武家屋敷跡・II』岡山市教育委員会
出宮徳尚・根木修1979『足守庄莊園緊急発掘調査 延寿寺第2次発掘調査概報』岡山市教育委員会
出宮徳尚・神谷正義1980『足守庄莊園遺構緊急調査 胜示比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会
福田正継1984『龍王塚古墳－新岡山空港建設に伴う発掘調査－』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告58）
岡山県教育委員会
岡山市教育委員会2002『岡山市埋蔵文化財センター年報1』
岡山県教育委員会1991『栗井大塚2号墳・14号墳』『岡山県埋蔵文化財報告21』

第2章 調査の経緯と推移

第1節 調査の契機

醫王谷古墳・醫王谷遺跡は、岡山市日近、足守川の支流日近川左岸の、やや開けた谷部に位置する。当該地は足守土地改良区が平成16年度から平成19年度の予定で実施する農地等高度利用促進事業（圃場整備）の計画地内にある。当該地は平成15年3月刊行の『改訂 岡山県遺跡地図』により、計画地内に埋蔵文化財が周知されており、整備着手前に確認調査を実施する必要が生じた。そして平成16年度に確認調査を行い、削平された古墳や製鉄関連遺跡の存在を指摘し、平成17年2月15日付け岡教文第804号「埋蔵文化財等の存在状況確認調査の実施について（通知）」で通知した。工事計画では遺跡想定範囲内に4面ある水田のうち標高が高い方にある2面を掘削し、低い方にある2面に盛土を施すことによって、4面ある水田を2面に整備し、耕作面を従来より広く確保することを目的としていた。そのため、掘削の対象となる上段2面の水田面が調査の対象となった。その後の協議の結果、調査対象地内の埋蔵文化財すべてを現状保存することは困難であったため、上段2面の水田面について記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして発掘調査計画書を作成し、費用負担等について協議し、平成17年度に調査期間約3ヶ月として、調査の実施と足守土地改良区の費用負担について合意した。発掘調査は平成17年10月5日に着手し、平成17年12月5日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」が提出された。発掘調査面積は3000m²である。

発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 山根文男

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）
亀田修一（岡山理科大学教授）
西川 宏（前岡山理科大学講師）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（前岡山市文化財保護審議会会長）

発掘調査担当者 根木 修（岡山市教育委員会文化財課課長）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課専門監）
神谷正義（岡山市教育委員会文化財課副専門監）
草原孝典（岡山市教育委員会文化財課主任）
安川 満（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事）

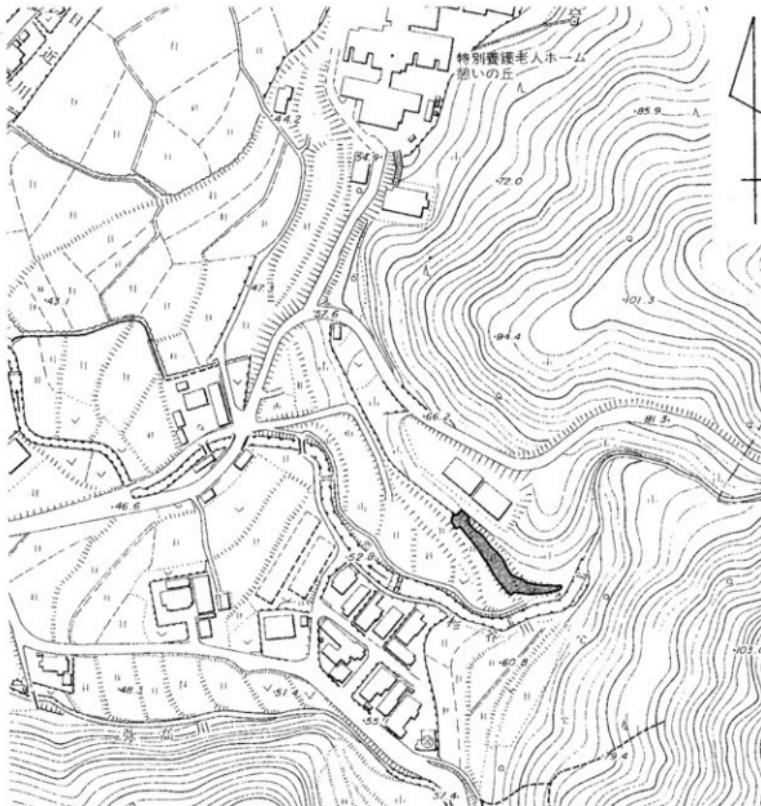


図3 調査位置図 ($S = 1/2500$)

調査員 長谷川一英（岡山市教育委員会文化財課主任）

西田和浩（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事補）

経理員 柿本貴子（岡山市教育委員会文化財課主事）

出土遺物整理 山元尚子

第2節 経過と概要

遺跡は水田に利用されていたため、調査区の中央で大きく段差が形成されている。そのため、古

墳・古墳と同一段の水田面（下段）・上段の3区画に区分して調査を行った。上段では耕土直下で一辺1mを超える巨大な礫を多量に含む花崗岩風化土層が確認され、これが基盤層と考えられた。確認調査で観察された状況と異なって、明確な埋蔵文化財包含層および遺構面は確認されなかった。下段は弥生～中世の土器片を含んだ包含層がわずかに確認された。南へ進むほど基盤層は高くなり、上段と同様巨大な礫を含むようになる。人工的なものかどうか判然としないが、不明確な土坑を十数基検出した。

調査区下段の北端では、分布調査の際確認されていた横穴式石室を調査した。古墳は新規発見であったため、小字名から「醫王谷古墳」と命名した。古墳の背後は斜面となり、倉庫が建てられている。斜面には崩落防止用のコンクリート製防護壁が設置されており、圃場整備の計画地外であったため、古墳背後の調査は行っていない。石室内はすでに盗掘を受け、墳丘も水田により大きく削平されていた。石室内からは人骨の出土はなかったものの、須恵器・金属製品などの副葬品が出土し、また古墳の周溝を一部ながら確認することができた。出土した須恵器からみて、古墳は6世紀後半に築造され、7世紀初め頃まで追葬ないしは墓前祭祀が行われたものと考えられる。鉄滓・炉壁等は出土したもののが、当初予想された製鉄関連遺構は確認できなかった。石室の埋土からは中世土器とともに铸造に用いられた鋳型の破片が出土しており、当初製鉄関連遺物とみられたものは、中世の鑄物師の活動に起因するものと考えられる。

工事により古墳前庭部側は削平されることとなったが、天井石を含む背面側は石室を破壊すると背

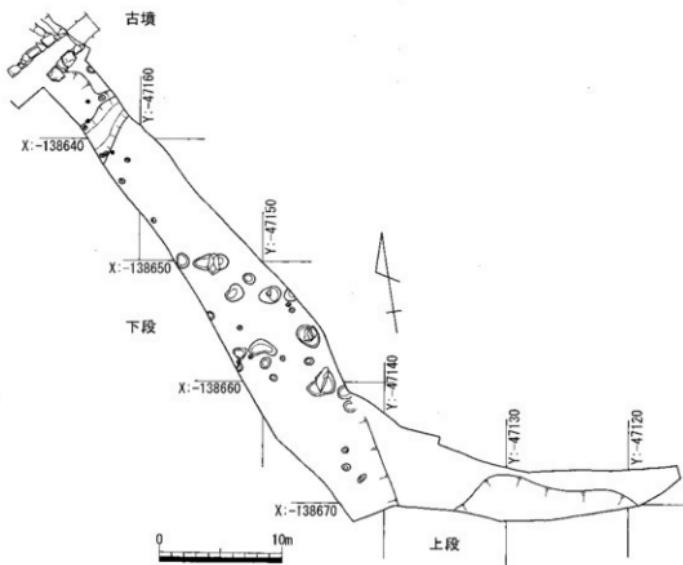


図4 醫王谷遺跡・古墳全体図 (S = 1/400)

後の斜面に悪影響を及ぼす可能性がある点から、発掘調査終了後、天井石部分は現状で保存し、なおかつ石室内に土を充填することで石室を補強した。11月26日には現地説明会を開催し、地元の方々を中心に約200人の参加者があった。なお、現地説明会開催に際し、「特別養護老人ホーム憩いの丘」から、見学者用の駐車場を提供いただいた。記して感謝したい。

第3節

日誌抄

- 10月5日 発掘調査開始。テント設営。
- 10月7日 古墳、遺跡下段、調査開始。
- 10月20日 古墳、石室奥壁付近で床面確認。
- 10月27日 足守中学校1年生見学
- 11月10日 古墳、石室内で耳環出土。遺跡、下段の調査終了し、上段の調査に着手する。
- 11月18日 石室内完掘し、本日より石室実測にはいる（22日まで）。
- 11月22日 遺跡、上段の調査終了。
- 11月26日 現地説明会 参加者約200名。
- 11月28日 高田小学校4年～6年生見学。
- 11月29日 対策委員会
- 12月5日 古墳、石室の封印。器材撤収し、発掘調査終了。



図5 現地説明会風景

いおうだに 第3章 醫王谷古墳

第1節 遺跡の概要

醫王谷古墳は確認調査の際に発見された古墳である。そのため岡山県および岡山市発行の遺跡地図に記載されておらず、小字名をとって醫王谷古墳と命名した。

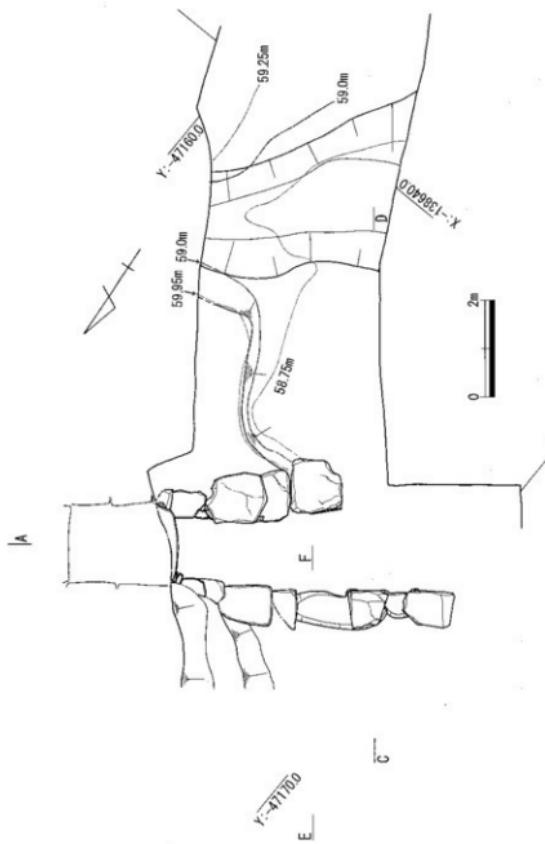
先述のとおり、醫王谷古墳は発見当時すでに石室が大きく開口し、内部に多量の土砂が流入していた。調査前の石室規模は、長さ約5m、奥壁で高さ2m、幅1.5mを測り、当地域では大形の部類に属するものであった。古墳の東に隣接する醫王谷遺跡では基壇層から多量の巨岩が露出している。おそらくこれらの礫を石室の材料にしているものと考えられる。石室は開口部側の天井石が失われていたものの、側壁は比較的よく遺存していた。側壁は墳丘を削って形成した水田の境界として利用されている。このことが現在まで石室がよく残ってきたことの要因の一つといえる。また、古墳の背後には斜面崩落防止のため設置されたコンクリート製の防護壁が作られていた。この防護壁の土台は、一部を石室および背後の墳丘によって支えられている構造となっている。そのため、石室を破壊すれば防護壁にその影響の及ぶ可能性があった。そのため、古墳の上に作られた防護壁を守るために、石室は残ることとなった。石室内からは、中世土器をはじめとする古墳時代以降の遺物が出土しており、すでに盗掘を受けているようであった。しかし、床面直上から多数の副葬品を検出することができた。石室の遺存状況とは反対に、石室の入口付近は後世の開墾によって墳丘のはんどんを削平されていた。古墳の発見当初、石室入口に多数の小礫が積まれており、この小礫群は閉塞ではないかと考えていた。しかし、小礫の除去中に近世の陶磁器や現代遺物が出土したため、江戸時代以降に形成されたものであることが明らかとなった。また、開口部に袖石らしき礫が1点据えられていた。しかし、その底部からまたしても近世の陶磁器片が出土したため、江戸時代以降に石垣の一部として据え付けられた石であることが判明した。

第2節 遺構と遺物

1 墳丘（図6・図7）

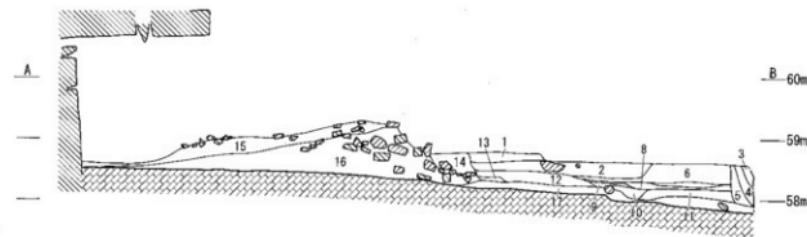
調査範囲はすでに水田により改変されており、墳丘の盛土を調査範囲内で確認することは困難な状況となっていた。従って、墳丘の土層は調査区北壁の断面など、限られた範囲で確認せざるを得なかった。それとともに、石室主軸および、それに直行するトレンチを設定した。墳丘は後世の耕作・造成によってほとんど失われていた。とりわけ、墳丘西側は激しく掘削されており、原形を留めていなかった。しかし、墳丘東側で古墳の周溝とみられる、やや曲線を描く溝状の窪地を確認した。そこから墳丘の規模を想定すると、直径14mの円墳であると考えられる。墳丘西側にもトレンチを設定したもの、調査範囲内では西側の周溝をとらえることはできなかった。その代わり、石室の掘り方を確認することができた。掘り方の上半部は削平されていたが、断面観察から判断すると、地山を掘り込んで形成していることを確認できた。一方、墳丘の東側は後世に水田用の石垣・暗渠等が設置されていたためか、非常に残りが良くなかった。下層からは本来古墳に伴っていたと考えられる須恵器片

図6 墳丘平面図 ($S = 1/100$)



とともに中世から近世の遺物が出土している。また断面観察によって、基盤層の直上に弥生時代後期を中心とする遺物包含層を確認した(図7 横断面1の8層・横断面2の7層)。墳丘はこの包含層の上に盛土を施して形成されている。包含層は西へ進むに従って厚く堆積している。残存する盛土内から弥生上器の細片が出土している点から、墳丘は周囲の包含層の土を古墳の盛土に利用していると考えられる。

前部側も後に造成を受けている。石室の開口部から南西へ向かって、1m近く堆積している造成土を確認した。造成土の先是石垣が築かれており、そこから一段大きく下がって別の水田が広がっている。造成土の中から、中世・近世の遺物とともに須恵器が少なからず出土している。また、大型の礫が造成土中から出土している。それらの礫は本来石室に利用されたものであったと考えられる。そして、ここから出土した須恵器も本来石室に由来するものであったのだろう。従って、中世段階に盗掘を受けた可能性が高く、その際に前部付近も大きく破壊されたと考えられる。



石室主軸		
1 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)	6 にじい黄色砂質土 (2.5Y6/3)	12 灰黃褐色粘質土 (10YR4/2)
2 にじい黄色砂質土 (2.5Y6/3)	7 黄褐色砂質土 (2.5Y5/1)	13 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)
3 明黄褐色砂質土 (10YR6/3)	8 明黄褐色粘質土 (10YR6/8)	14 極灰色細砂 (10YR4/1)
4 黄褐色粘質土 (2.5Y6/1)	9 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)	15 灰黃褐色砂質土 (10YR5/2)
5 明黄褐色砂質土 (10YR6/8)	10 極灰色砂質土 (7.5YR6/1)	16 灰褐色粘質土 (7.5Y6/2)
	11 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2)	17 極灰色砂質土 (7.5Y4/1)



横断面 1		
1 極灰色細砂 (10YR4/1)	4 黄褐色粗砂 (10YK7/8)	8 黑褐色細砂 (5YR3/1)
2 極灰色細砂 (7.5YR4/1)	5 黑褐色細砂 (5YR3/1)	
3 灰黄褐色細～粗砂 (10YR4/2)	6 にじい黄褐色細砂 (10YR6/4)	
	7 明黄褐色細～粗砂 (10YR6/4)	

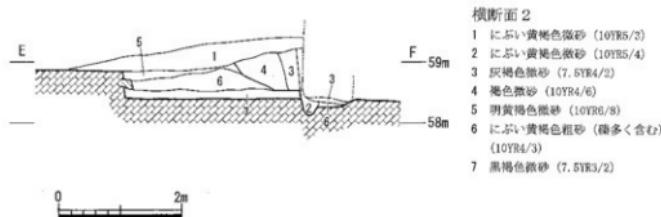


図7 填丘断面図 ($S = 1/80$)

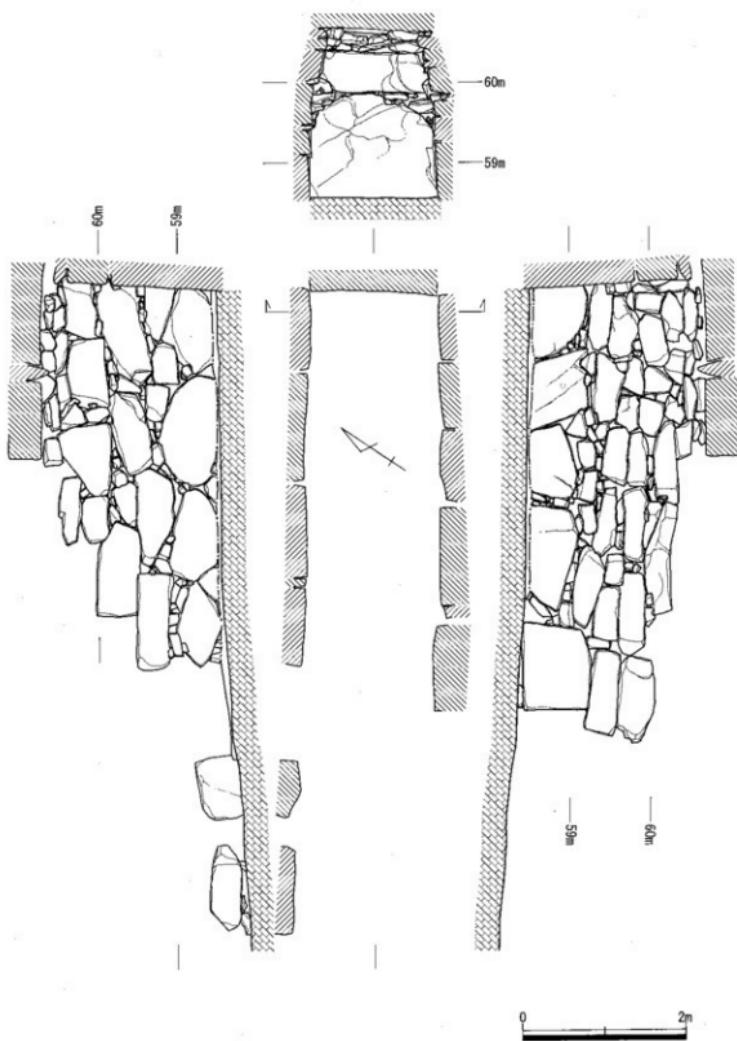


図8 横穴式石室実測図 ($S = 1/60$)

2 横穴式石室（図8）

石室は大きく破壊されているため、玄室・羨道の規模や袖の有無といった石室の特徴を把握できない。石室は奥壁側から約2.5mまで天井石が遺存し、側石も約5m程までは側壁が残り、根石は8mまで確認できた。以上の点から、石室の規模は全長8m以上、幅は奥壁底面で約1.6m、高さは奥壁で約2.2mを測る。奥壁は2段で構成され、天井石との隙間には板状の礫を充填する。

側壁は根石に1m角の巨石を用いて4段に積み上げ、部分的に小砾を積んで高さを調節している。持ち送りは4段目から行われているようである。左側壁に積まれた礫は、右側壁に比べてやや大ぶりのものを使用している。礫はいずれも面の揃ったものをしようしているが、切石にしてはやや粗雑な印象を受ける。また、天井石は3石残存していた。

床面には板石等が敷かれていた痕跡を確認できなかった。遺物等も地山直上から出土しており、石室の床面は地山を削平して形成したものとみられる。床面は開口部に向かって低くなっている。

石室主軸

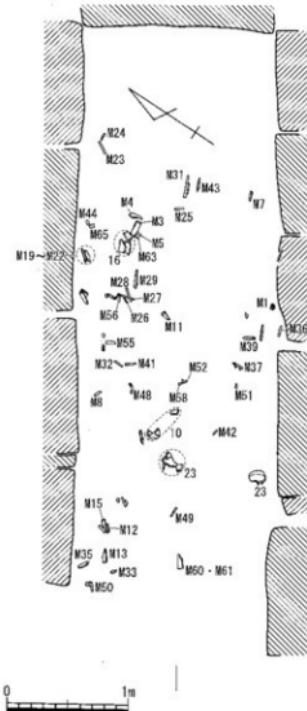


図9 石室内遺物出土状況図 (S = 1/40)

3 石室内遺物出土状況（図9・図10）

石室内は擾乱土層が厚く堆積しており、床面から大きく離れていたため図示しなかった遺物として須恵器片、鉄鎌、鉄釘などがある。石室内は激しく擾乱をうけており、床面付近に遺物は無いのではないかと思われた。しかし、その予想とは反対に、石室の床面では遺物が多数確認された。鉄製品が圧倒的に多く、その中でも鉄鎌・鉄釘が大半を占めている。遺物は散漫に分布しており、また棺痕跡・人骨などを検出できず、副葬品として明らかに原位置を留めていると判断できる遺物はみられなかった。鉄釘・鎌など縦結金具が出土している点から、木棺の存在を推測するに留まる。いくつかの器種についてはわずかに分布傾向がみられるることを確認した。しかしこれが有意のものかどうかについては判断しがたい。

器種別の分布状況は、金属製品のうち1点出土した耳環は、石室東壁中央の床面直上から出土した。その他装飾品と考えられる遺物は出土していない。馬具は、ほぼ一括の状態で出土している。金属製品の中で最も多く出土したのは鉄鎌・鉄釘である。鉄鎌は石室主軸から西半にややまとまって分布する傾向がみられる。鉄釘は石室内に散漫に分布しており、特徴的な分布傾向を示さないようである。その他の遺物とし

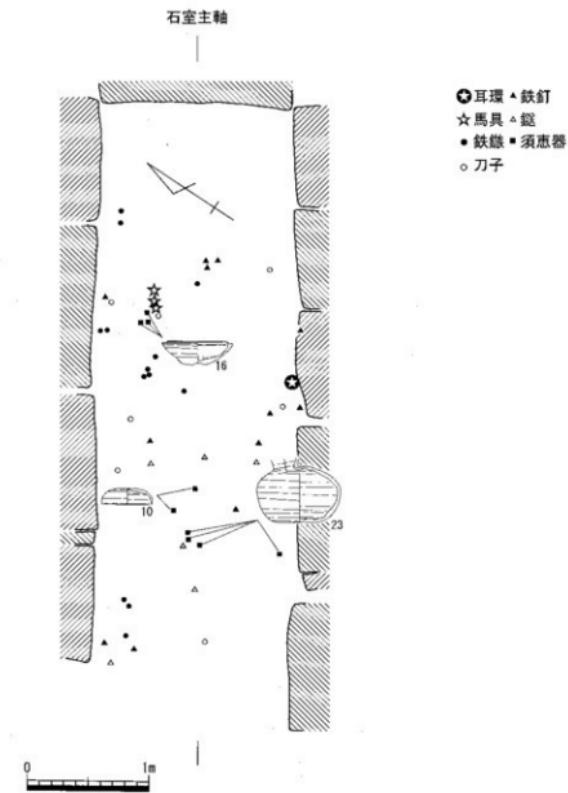


図10 器種別遺物出土状況図 (S=1/40)

て、鏡は石室開口部側に分布し、奥壁側ではみられないという傾向を指摘することができる。須恵器のうち、床面直上から出土したもので、接合関係のあるものは3個体である。

須恵器は床面付近からあまり出土しておらず、開口部周辺の埋土および、その前面の整地された造成土内から中世土器とともによく出土している。

4 遺物

(1) 金属製品 (図11～図15)

出土した遺物のうち、被葬者の装飾品と考えられるものは耳環1点のみであった。その他副葬品として馬具・刀装具（鐔）・鉄鎌・刀子がみられ、木棺等の木製容器の緊結金具として鉄釘・鎧が出土している。なお、図示したもの以外に鉄鎌・鉄釘の小片や不明鉄製品がある。

耳環 (M1)

鍍銀された耳環が1点出土した。完形品で銅地銀張りの中実である。外径32mm、断面は径7mm、重量25.0g、突き合わせ部の間隔は1.5mmを測る。表面には、銀が良好に残存しているが、突き合わせ部分にわずかながら剥落を観察できる。石室内から出土した、被葬者と直結する唯一の装飾品である。耳環周辺では棺痕跡・人骨などを確認できなかったため、遺物は原位置ではなく二次的に移動したものと推測される。

鐔 (M2)

鉄製で透かし彫り等の装飾はみられない。半分以上欠損しているため、本来のサイズは明確にできないものの、推定長さ6.0cm、幅4.0cm、厚さ0.3cm程度であったと推測される。刀身およびその他刀装具は出土していない。石室開口部の流入土中から出土した。床面付近からの出土ではないため遺物出土状況図には示していない。

鐘状鉄製品 (M3)

吊金具と共に出土している点から、馬具の可能性がある。形態は判然としないが、木芯鐘の底部と考えられる。長さ13.5cm、幅2.0cmを計る。立ち上がりが外側と内側の2重に確認され、内側の立ち上がり部分の上面には一部木質が確認される。さらに木芯部を固定するための釘状の突起が二箇所遺存している。このような類例は現在のところ管見に触れておらず、鐘以外の鉄製品である可能性も考慮しなければならない。

吊金具 (M4・M5)

巻本体は確認できなかったものの、鏡板の立闇と面鑑の間を接続した吊金具とみられる鉄製品が2点出土した。2点とも立闇と接続する釣り手部分は欠失しているものの、M4の欠損箇所からの立ち上がりかたが、吊り手状になると想定できる点から、吊金具と判断した。2点の吊金具は、M3の鐘状鉄製品と共に出土しており、一括遺物と考えられる。

刀子 (M6～M8)

床面付近から出土した6点のうち、3点図化した。M6はほぼ完形品で、木質が残る。M7・M8は両端を欠き全体がわからないが、断面から刃部とみられるため、刀子と判断した。この他不明鉄製品としたものの中にも刀子状の鉄器が含まれる。

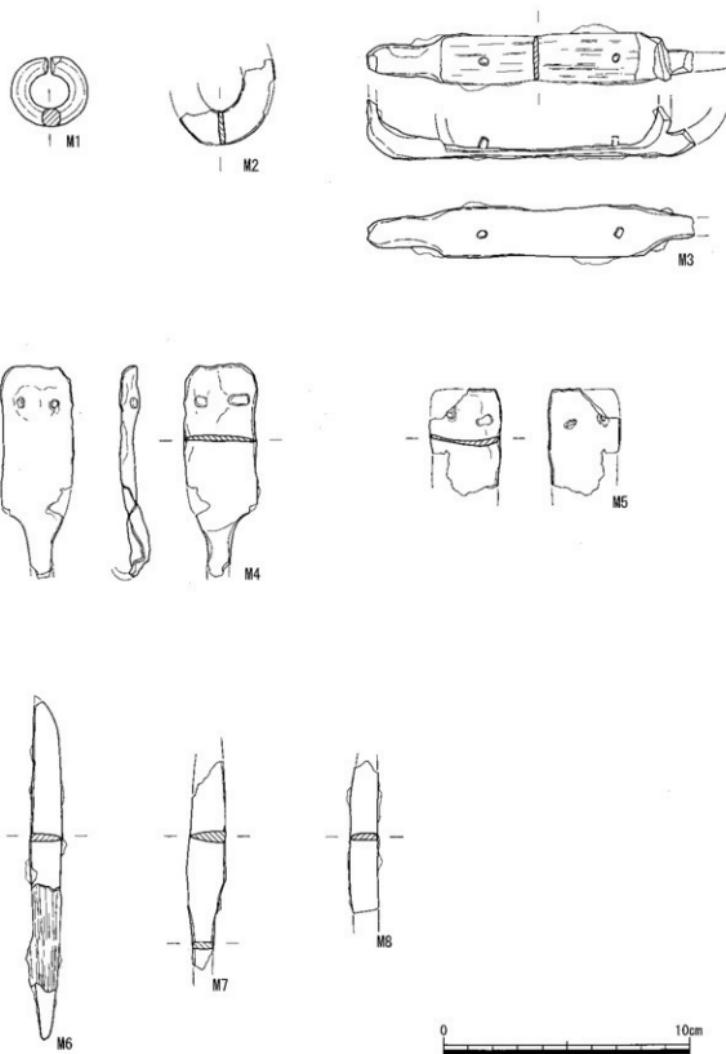


図11 金属製品1 ($S=1/2$)

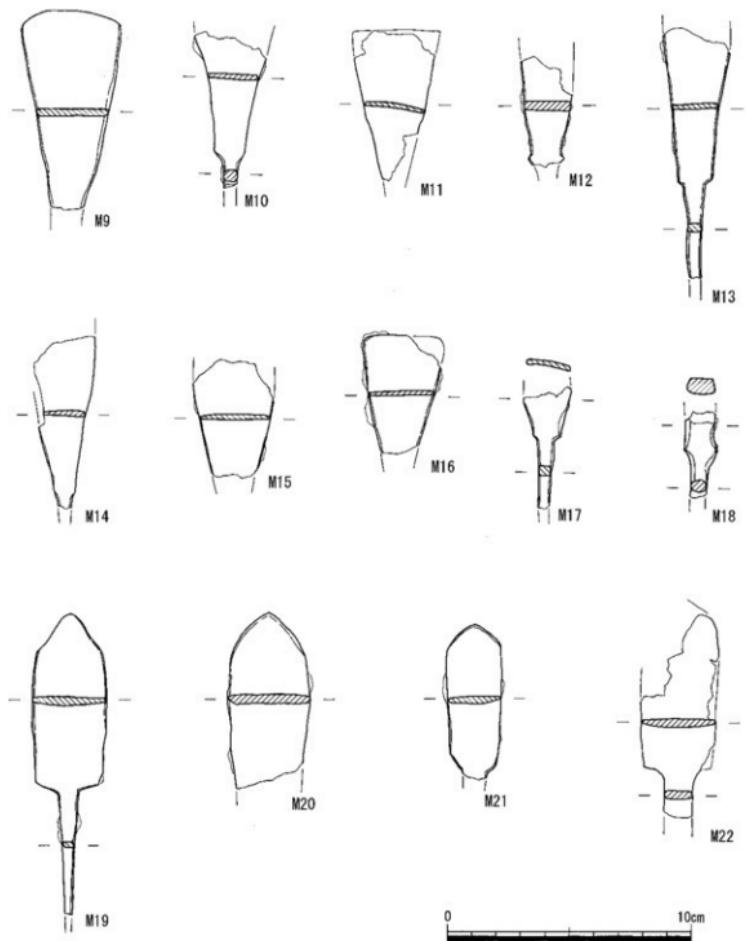


図12 金属製品2 (S=1/2)

鉄鎌 (M9~M30)

鉄鎌は21本出土しており、有茎平根式 (M9~M22) が14本、長頭式 (M23~M30) が7本確認された。いずれの鉄鎌にも木質の付着はみられなかった。鎌身部の形態が、判明あるいは推定できるもののうち、平根系は五角形式 (M19~M22) が4点、方頭式 (M9~M17) が9点である。同様に、長頭式 (M23~M30) では柳葉式 (M23・M25~M27) が4点、片刃箭式 (M28) が1点確認された。

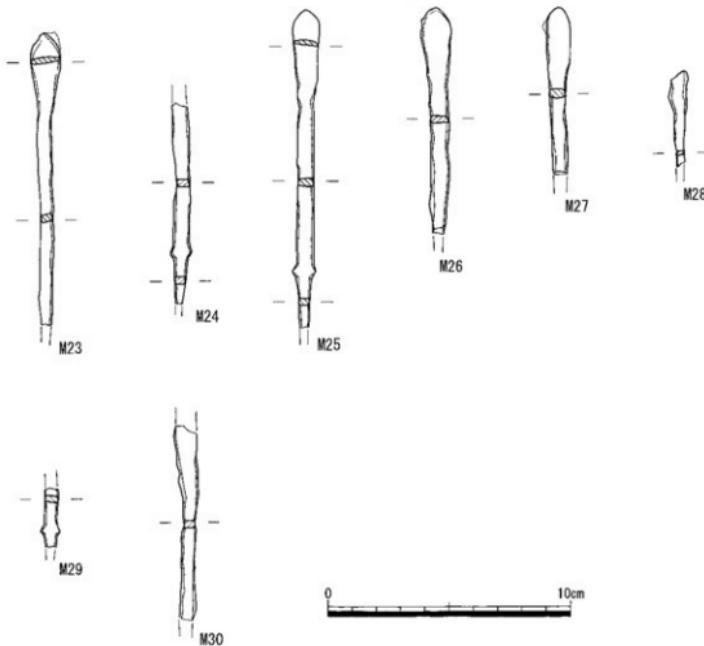


図13 金属製品3 ($S=1/2$)

鉄釘 (M31～M47)

鉄釘は破片を含めて14本出土している。木質を確認できるものはなかった。大型品と小型品に大きく分類可能である。大型品 (M31～M41) は全て、頭部を作り出さないタイプである。小型品 (M42～M47) のうちM42は頭部を一端に折り曲げるタイプである。M44～M47は鎌に分類できそうであるが、当古墳で出土している鎌と比べて軸が太く、頭部の折り曲げ方も明らかに異なっている。

鎌 (M48～M54)

7点出土している。木質を確認できるものはなかった。背部が長いもの (M48・M54) と短いもの (M52) を確認できる。

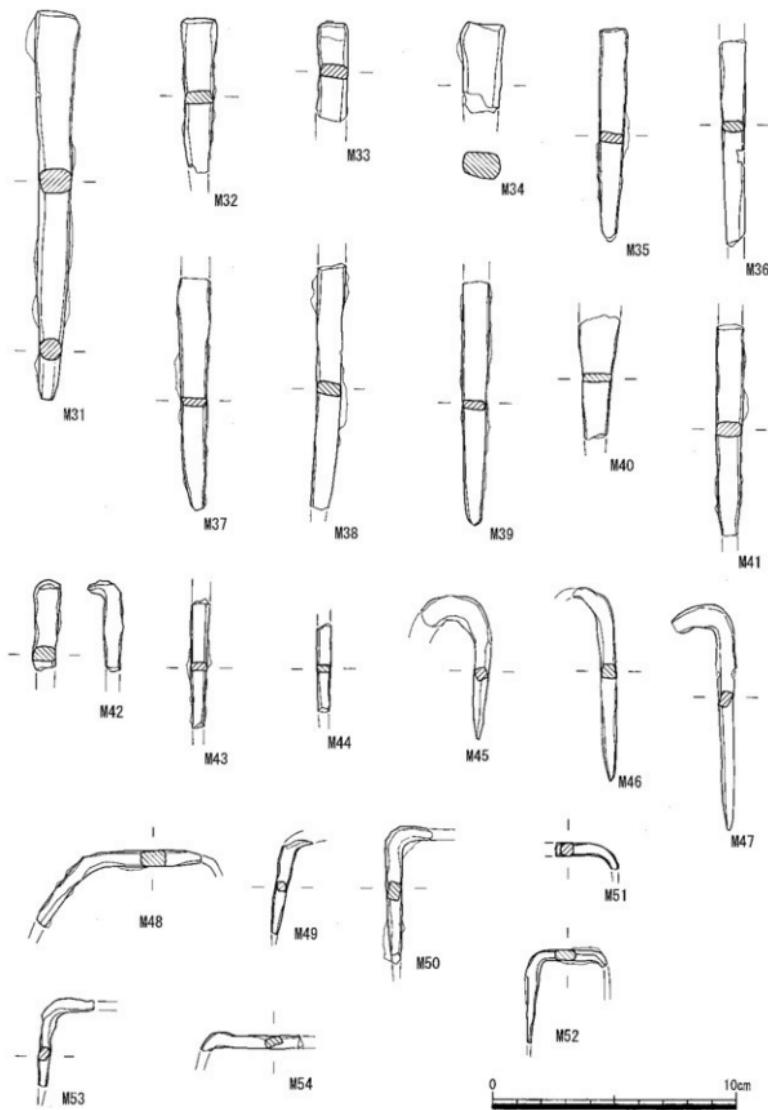


図14 金属製品4 (S=1/2)

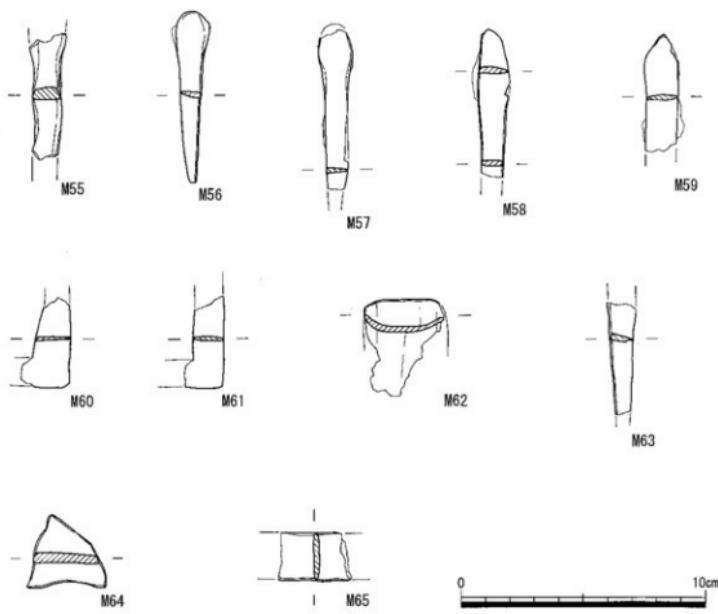


図15 金属製品5 ($S=1/2$)

不明鉄製品 (M55~M65)

M55は鉄釘と思われる。M56~M59・M63は薄手の板状製品である。M56・M63は刀部状の側縁を呈しており、刀子状の製品と考えられる。M57~M59は長頸式鉄鎌の一部と思われる。M60~M62・M64・M65も同様に扁平な板状製品である。M60・M61はL字状を呈する鉄製品で、刀子や鉄鎌と明らかに異なる。飾り金具の一部であろうか。M62は断面がU字型に湾曲する板状の鉄製品である。破片のため用途は明らかにできない。M64・M65は扁平な板状鉄製品の小片である。M64は他と比べてやや厚みがあるものの、小片のためM65共々用途は不明である。

(2) 須恵器 (図16・図17)

石室およびその周辺から多数出土している。石室前面は後世に大きく破壊されており、中世・近世の造成土からは本来石室あるいは前庭部にあったとみられる須恵器が出土している。また、石室内でも流土中から出土したものが多い。石室の床面直上から出土したものは、須恵器全体からみると非常に少ない。器種構成は、杯蓋・杯身が多く、これに高杯・平瓶・脚台付椀・壺・甕が少量加わる。各須恵器の時期に大きな違いはみられず、TK209～TK217（6世紀後半から7世紀初頭）の範疇とみられる。

杯蓋 (1~10)

10個体出土した。調整および法量から大きく2つに分類できる。

1類 (1~6) は内外面に横ナデを施し、天井部1/3に回転ヘラケズリの痕跡が確認されるものと(1~4)、ケズリの痕跡を持たないもの(5~6)に細分できる。1と4は天井部が丸みをもち、端部をやや垂下状におさめる。2と3は天井部を欠くものの、残存部からみてやや扁平気味になり、端部はやや外傾する。5・6は回転ヘラケズリ後、回転ナデが施される。2点とも天井部を欠く。

2類 (9・10) は法量の面で1類より小さい。他が口径14~15cm、器高4~5cmを測るのに対し、口径10~11cm、器高3~3.5cmとなる。9には回転ヘラケズリの痕跡がみられる。端部は9がやや外傾し丸くなるのに対し、10の端部は垂下しつつやや鋭くおさまる。

杯身 (11~18)

8個体出土した。立ち上がりの有無で大きく2つに分類できる。

1類 (11~17) はいずれも内外面に横ナデを施し、底部から1/3付近まで回転ヘラケズリを施す。

2類 (18) は底部外面に回転ヘラケズリを施す。これにともなう蓋は出土しなかった。

高杯 (19~21)

3個体出土した。杯の破片(19)と脚裾部を欠くもの(20)と脚部と杯の一部(21)の個体である。19は内外面を回転ナデの後、外面に沈線を一条めぐらす。立ち上がりは直立する。20は内外面を回転ナデの後、外面に沈線を2条めぐらす。立ち上がりは外反する。21は脚部のみで、杯部を欠く。内外面に回転ナデを施し、脚端部は拡張しながら内傾する。

平瓶 (22・23)

2個体出土した。完形のもの(22)と口縁部を欠くもの(23)の計2個体出土している。22は石室開口部付近から出土した。当初、石室の袖石と考えられた付近から流土を被らず出土したため、追葬に伴う片付けの痕跡と考えたものの、その後の調査の結果、袖石は近世以降に据え置かれたものであると判明し、22の出土状態も近世以降の所産であることが明らかになった。23は石室の床面直上から出土した。器面上半に緑灰色の自然釉がみられる。

脚台付椀 (24)

1個体出土した。ほぼ完形である。口縁部はやや内傾する。調整は回転ナデが内外面に施される。脚部は内傾しながら下方に拡張し、端部は水平におさめる。石室外の造成土中から出土した。

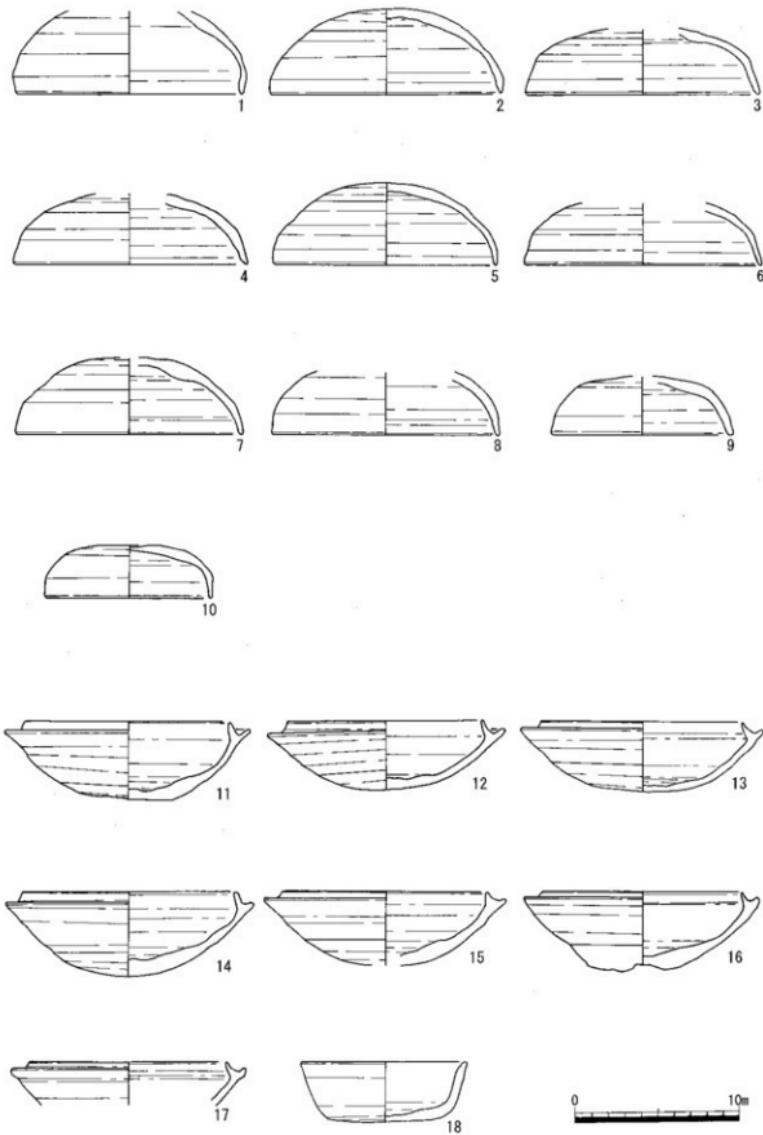
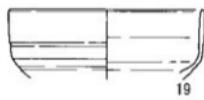


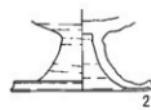
図16 須恵器1 ($S=1/3$)



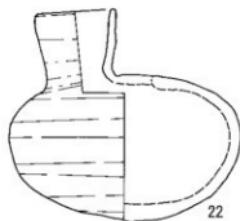
19



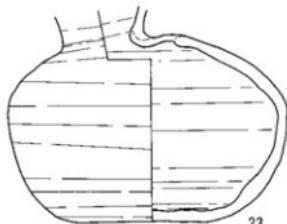
20



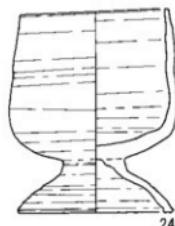
21



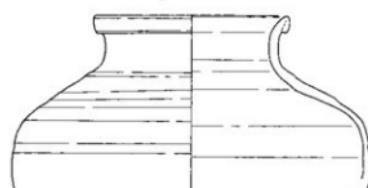
22



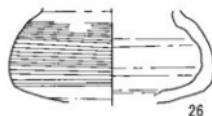
23



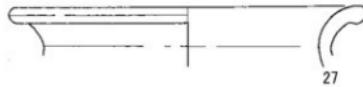
24



25



26



27



図17 須恵器2 (S=1/3)

壺 (25・26)

2個体出土した。25は下半部を欠いている。口縁部はやや外傾気味に開く。内外面ともに回転ナデによる調整が観察される。26は胴部とみられる。石室外の中世造成土中から出土した。

甕 (27)

1個体出土した。甕の口縁部である。自然釉がみられる。内外面に回転ナデを施す。石室外の造成土中から出土した。

(3) 他の時代の遺物 (図18~図24)

弥生土器 (28~33)・石器 (S 1)

墳丘盛土から出土した。中期後半から後期初頭とみられる。28は甕の口縁部、29・30は甕の底部である。31は甕の口縁部と考えられる。32・33は高杯の脚部である。土層観察のため墳丘を立ち割ったところ、下層から弥生時代の遺物包含層を検出した。この包含層の上に墳丘が形成されており、古墳の築造に伴って、この包含層の土を墳丘盛土に利用したと推測される。S 1はサスカイト製の打製石包丁である。

土師器甕 (28)

中世の包含層から出土した土師質の甕である。外面にハケ目、内面にヘラケズリの痕跡がみられる。胴部中位が最大径となっている。時期は古墳時代中期と考えられる。醫王谷古墳の築造は石室内より出土した須恵器から6世紀後半頃と考えられるため、直接の関係は見出しがたい。

埴輪 (29)

石室の流土中から1点のみ出土した。破片のため全体を復元することはできないが、円筒埴輪ではないと考える。下端に接合のための刻み目を観察できる。醫王谷古墳から出土した埴輪はこの1点と、醫王谷遺跡で出土した器具埴輪の破片1点のみである。周辺でも埴輪を伴う古墳の存在は知られていないため、本資料の由来は不明としか言いようがない。

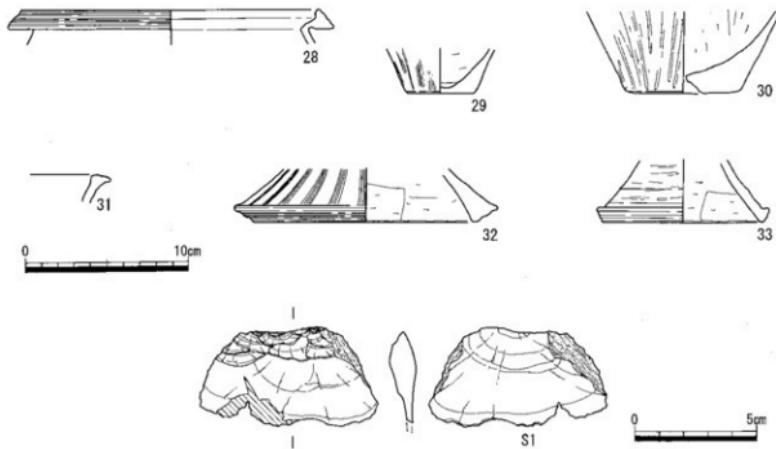
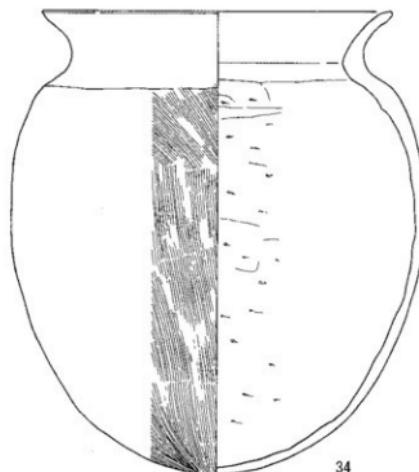


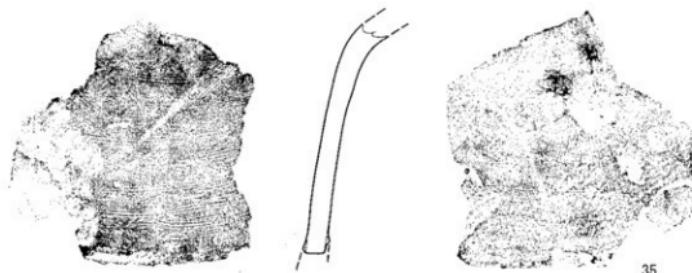
図18 弥生土器・石器 (S=1/3・1/2) ※石器のトーンは欠損を表す



34



図19 土師器塗 (S=1/3)



35



図20 塗輪 (S=1/3)

中世以降の土器・陶磁器 (36~57)

石室内およびその周辺から、古墳に直接伴わない土器が多数出土した。36は高台付椀で10世紀末頃と考えられる。37は外面に突帯を巡らした黒色土器で、内外面に丁寧なミガキが施される。当地域では類例のない遺物であり、岡山県下では笠岡市の関戸廃寺で出土している（安東・岩崎1997）。38は

底部の立ち上がりからみて高台付杯とみられる。39は高台付杯である。49～51は土師質の小皿である。いずれも口径は10cm前後を測り、底部はハラ切り後にナデを施している。これら遺物の年代は時期は10世紀末～11世紀初頭と考えられる。

40～48は吉備系土師器碗と考えられる。調整および形態から40・41は山本編年（山本1993）のⅡ期（12世紀末～13世紀初頭）、42・43はⅢ-1期（13世紀前半）、38～42はⅢ-2～Ⅲ-3期（13世紀後半～14世紀初頭）と考えられる。

52・53は土師質の鍋である。52は口縁部が「く」の字に外反し、外面に縦ハケ、内面に横ハケがみられる。53は口縁部が「く」の字に外反し、外面に縦ハケ、内面上半部に横ハケが施される。時期は12世紀末から13世紀前半と考えられる。54は須恵質の鉢である。片口を持ち、軟質に焼成されている。産地は明らかでない。55～57は近世の染付である。

鑄造関連遺物

石室内から鉄物の鋳造に使用した鋳型やそれに付随する炉壁・フイゴ羽口・鉄滓が多数出土した。これら鋳造関連遺物の時期は、中世～近世と考えられる。石室を廃棄場所として利用したのであろう。関連遺物の中に銅が付着したものを確認できなかったので、鉄製品の鋳造のみ行われていたようである。試掘調査の段階で確認された炉壁・鉄滓はこの鋳造関連遺物であった可能性が高い。

溶解炉（58～62）

径の復元できるものは確認できなかった。器壁は4～5cmを計り、内面はガラス状に溶解し部分的に鉄滓の付着を確認できる。58・60はフイゴの差込口とみられる穴が一部残存する。図示していないが、溶解炉の壁片がこの他多数出土している。胎土に粗穀を混和している。

フイゴ羽口（63～65）

3点確認した。いずれも破片で、全体を復元しうるものは出土していない。外面がガラス状に溶けた発泡し、鉄滓が部分的に付着している。断面を観察すると鉄滓の薄層が確認できることから、何度か利用されていたと考えられる。胎土に粗穀を混和している。

鋳型（66～69）

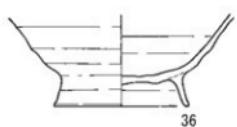
4点図示した。この他小片が出土している。大型の鋳型は仕上がりの段階で壊して製品を取り出すため破片で出土する。そのため、全体を復元できなかった。出土した鋳型は外型で、大型の鋳鉄物の生産がこの周辺で行われたと思われる。胎土に粗穀を混和している。

参考文献

安東康宏・岩崎仁司1997『閻戸廃寺』笠岡市教育委員会

山本悦代1993「2吉備系土師器碗の成立と展開」「鹿田遺跡3」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦代1997「岡山県南部における土師質鍋の変遷」「鹿田遺跡4」岡山大学埋蔵文化財調査研究セ

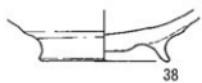
ンター



36



37



38



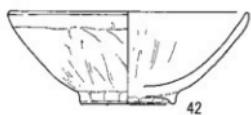
39



40



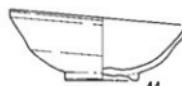
41



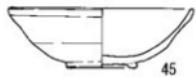
42



43



44



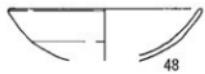
45



46



47



48



49



50



51



図21 土師質土器碗・皿 (S=1/3)

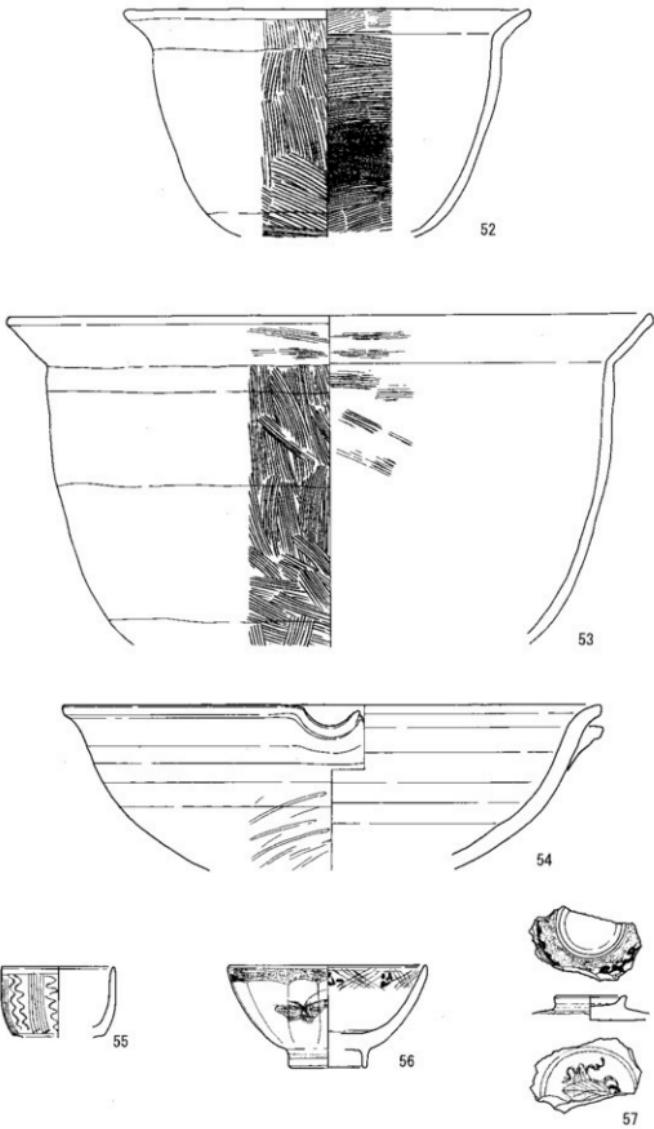


図22 鍋・摺鉢・磁器 ($S=1/3$)

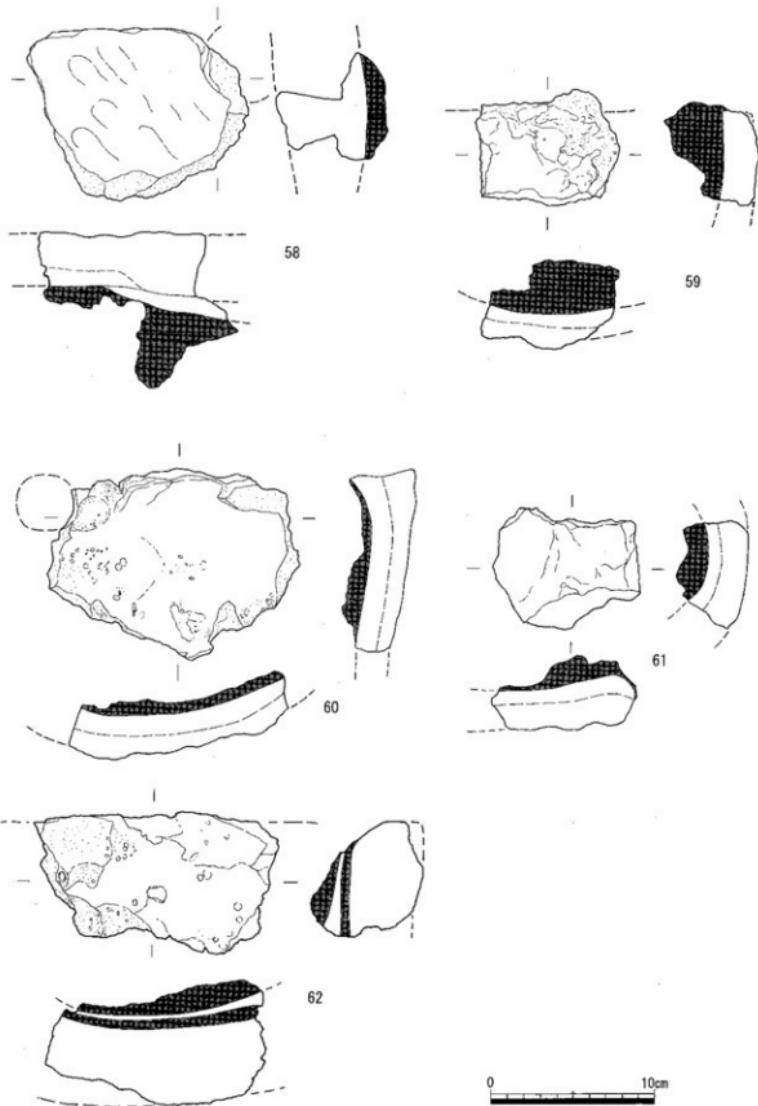


図23 鋳造関連遺物1 ($S=1/3$)
※トーンは鉄滓を表す

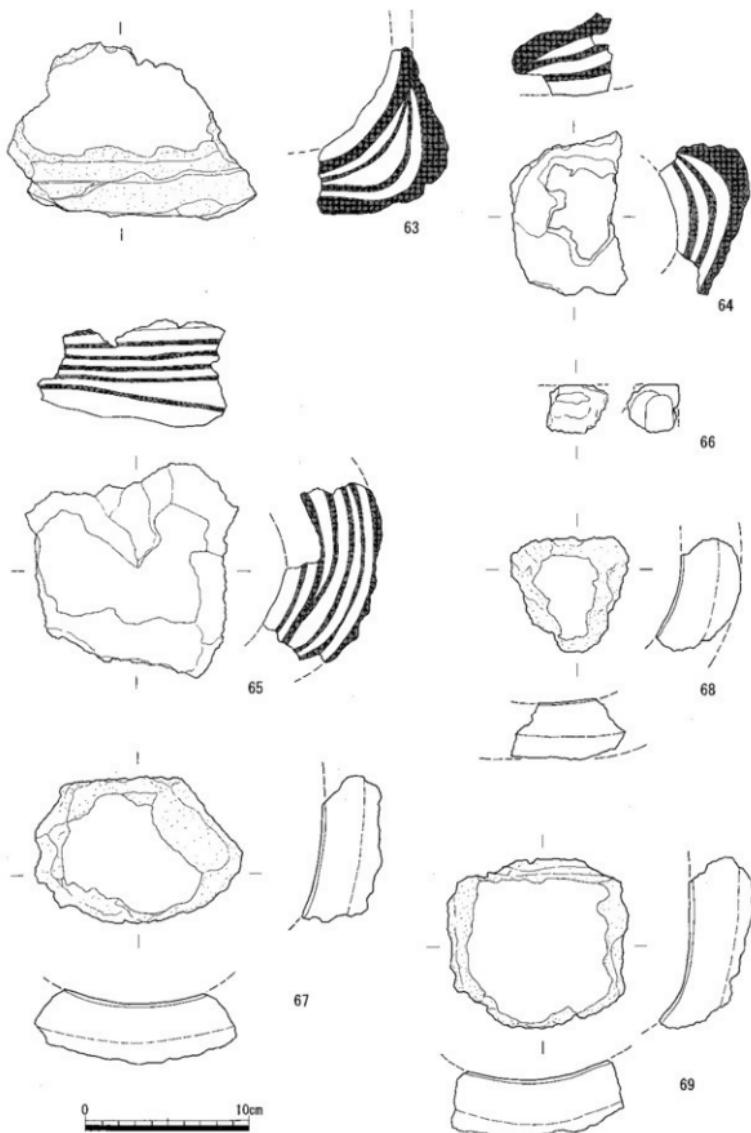


図24 錄造関連遺物2 ($S=1/3$)
※トーンは鉄滓を表す

第4章 醫王谷遺跡

第1節 遺跡の概要

醫王谷遺跡は日近川の支流、杉谷川の北に広がる散布地である。醫王谷古墳の南東に隣接し、現状では休耕地となっている。確認調査の結果では、鉄滓など製鉄関連遺物が出土しており、本調査では製鉄炉等の遺構の出土が予想された。しかし、調査区東半部の一段高い休耕地部分は、表土剥ぎの結果、現耕土の直下から多数の巨石と花崗岩風化土で構成される基盤層が確認された。遺構は存在しておらず、遺物も弥生土器および土師器の細片がわずかに出土したのみであった。

調査区を北西に進むほど、巨石の分布はみられなくなり、それとともに弥生時代を中心とする遺物包含層が徐々に厚く堆積していることを確認した。しかし、当初予想された製鉄関連遺構は出土せず、結局、調査は時期・用途不明の土坑を検出したのみにとどまった。包含層および土坑から、弥生土器の細片やサヌカイト製の石器がわずかに出土した。

遺構面は調査区上段には形成されておらず、下段のみで確認された。さらに、調査区下段で確認された遺構は上層と下層の2面を確認できた。上層は5層（オリーブ褐色微砂層）または6層（褐色微砂層）から掘り込まれている（図28）。これらは調査区の南半分で検出された。すべて用途不明の土坑であり、そのうちいくつかの土坑は巨石の周囲を掘り窪めて形成されている。下層で検出された遺構は、基盤層に掘り込まれたものである。上層と同様に用途不明の土坑を確認した。

第2節 遺構と遺物

1 遺構

上層（P1～P15）

調査区下段の南半を中心に土坑を15基検出した。住居跡等は確認できなかった。土坑の中には基盤層に由来する巨石の周囲を掘り窪めたものがみられる。土坑内から弥生土器の細片および、打製石包丁などが出土しており、それら遺物から時期は弥生時代と考えられる。

下層（P16～P36）

調査区下段の基盤層に掘り込まれている。上層と同様に用途不明の土坑のみ確認された。いずれも浅く、小規模な土坑である。遺構内からは弥生土器の細片が出土しており、時期は弥生時代と考えられる。

包含層

醫王谷古墳の東半分から醫王谷遺跡の西半にかけて、弥生時代から古代の遺物をともなう包含層が確認された（図27-第8層）。同時期の明確な遺構は確認されておらず、遺跡の中心は調査地点よりさらに上方に存在するものと考えられる。

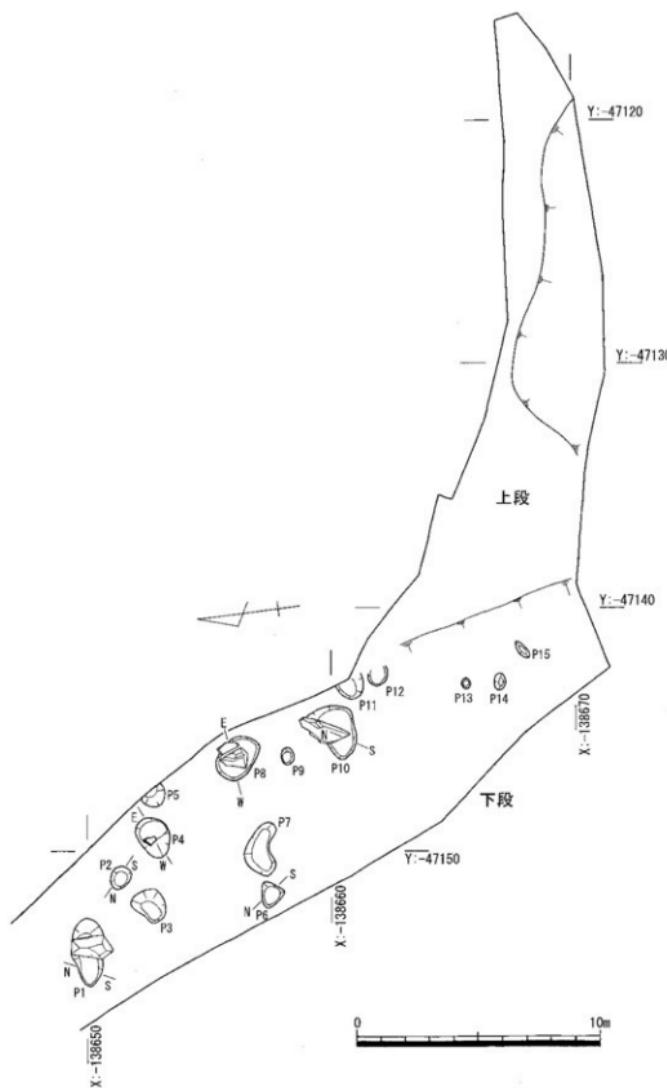


図25 醫王谷遺跡上層造構配置図 ($S=1/200$)

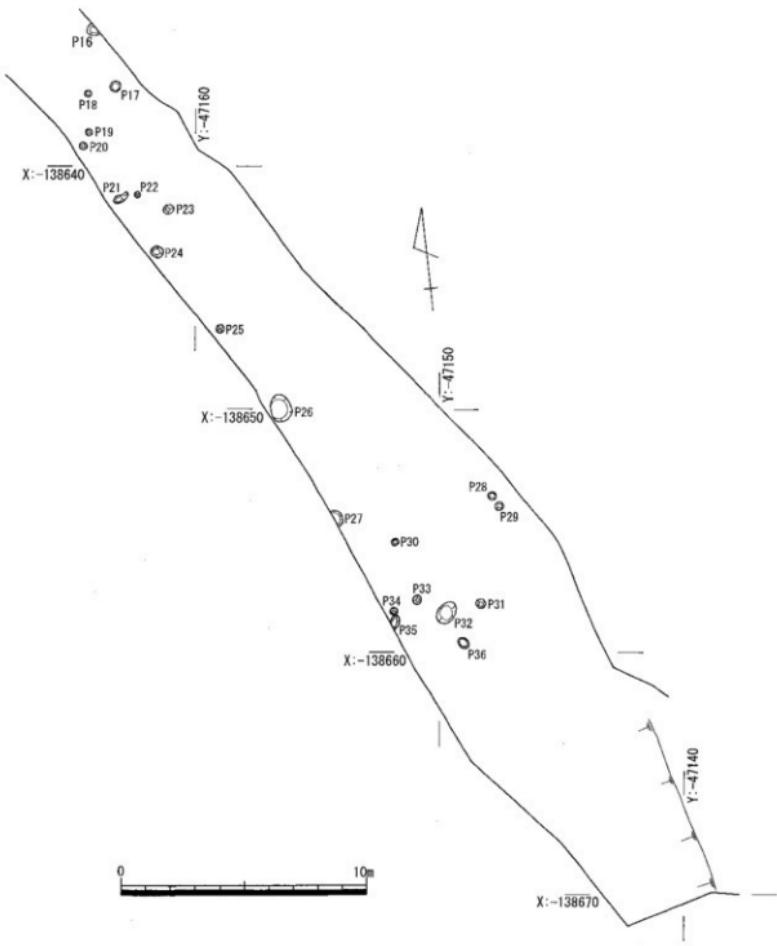


图26 醫王谷遺跡下層造構配置図 ($S=1/200$)

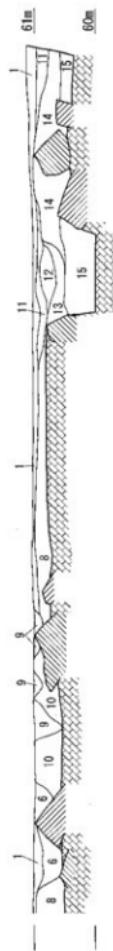
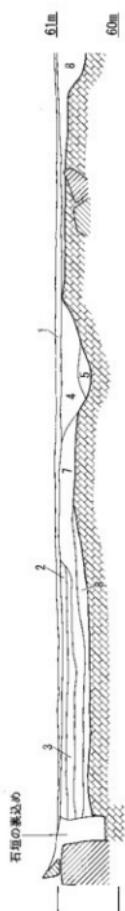
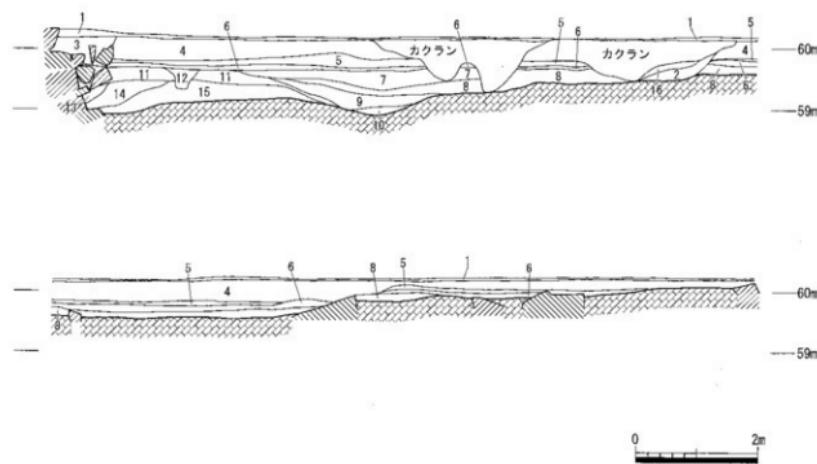
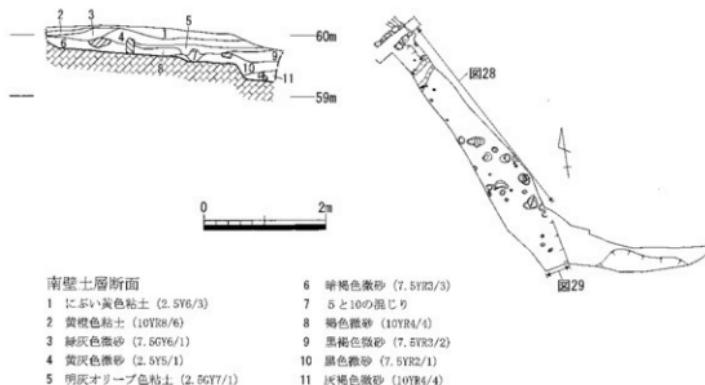


図27 猥王谷遺跡土層断面図1 (S=1/80)



- 東壁土層断面 下段
- | | | |
|----------------------|----------------------|---------------------|
| 1 オリーブ黒色微砂 (7.5Y3/1) | 7 黒褐色粘質土 (7.5Y3/2) | 14 暗灰色粘質土 (7.5Y4/1) |
| 2 灰色粗砂 (5Y4/1) | 8 端褐色粘質土 (7.5Y3/3) | 15 褐褐色粘質土 (7.5Y4/1) |
| 3 にがい黄褐色微砂 (10YR6/3) | 9 棕褐色粘質土 (7.5Y2/3) | 16 灰オリーブ色粗砂 (5Y5/2) |
| 4 灰色粘土 (5Y5/1) | 10 灰褐色粘質土 (7.5Y4/2) | |
| 5 オリーブ褐色微砂 (2.5Y4/3) | 11 黄褐色砂質土 (10YR4/2) | |
| 6 橙色微砂 (10YR4/4) | 12 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4) | |
| | 13 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/4) | |

図28 醫王谷遺跡土層断面図2 (S=1/80)



- 南壁土層断面
- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1 にがい黄色粘土 (2.5Y6/3) | 6 暗褐色微砂 (7.5Y3/3) |
| 2 黄褐色粘土 (10YR8/6) | 7 5と10の混じり |
| 3 暗灰色微砂 (7.5Y6/1) | 8 橙色鐵砂 (10YR4/4) |
| 4 黄灰褐色微砂 (2.5Y5/1) | 9 黑褐色微砂 (7.5Y3/2) |
| 5 明灰オリーブ色粘土 (2.5GY7/1) | 10 黑色微砂 (7.5YR2/1) |
| | 11 灰褐色微砂 (10YR4/4) |

図29 醫王谷遺跡土層断面図3 (S=1/80)

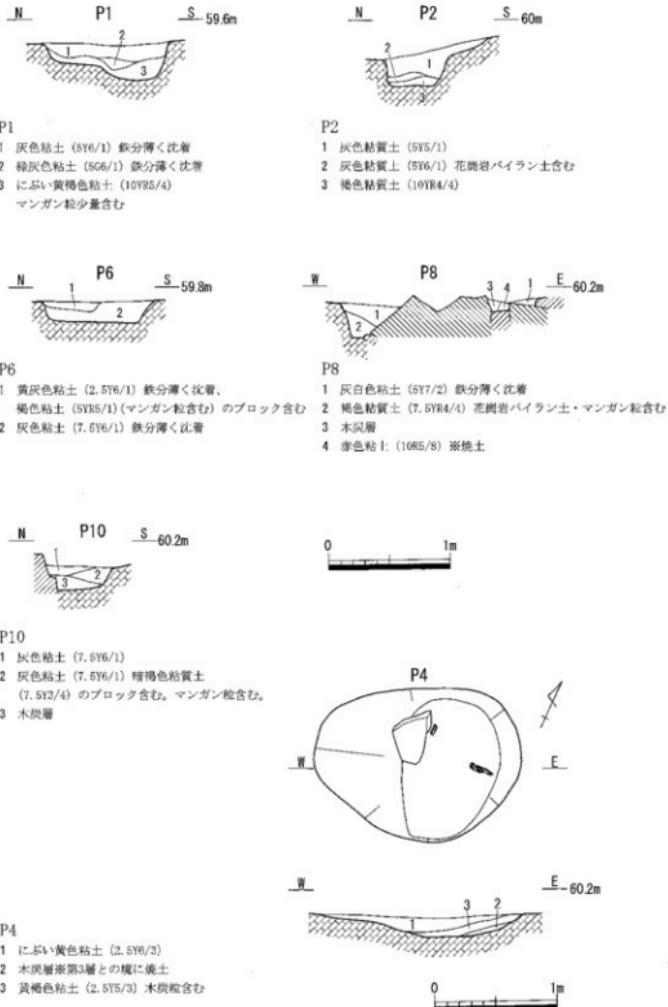


図30 出土遺構平面図・断面図 (S=1/40)

2 遺物 (1~5・S2)

各遺構および、包含層から弥生時代中期後半から後期初頭を中心とする石器および土器片が若干出土している。出土した遺物の多くは細片のため、図示したのは7点である。

1~4は弥生土器である。1は壺の口縁部、2は甕の口縁部、3・4は高杯の杯部で弥生時代中期後半から後期初頭とみられる。

5は表面に一部ハケ目の痕跡が残存する。器材埴輪の一部ではないかと考えられる。醫王谷古墳では石室の流土中から埴輪片が出土しているものの、その他に関連する資料が出土しなかつたため、その由来は不明である。

S2はスクレイバーである。腹面側から二次加工が施される。石材はサスカイトである。

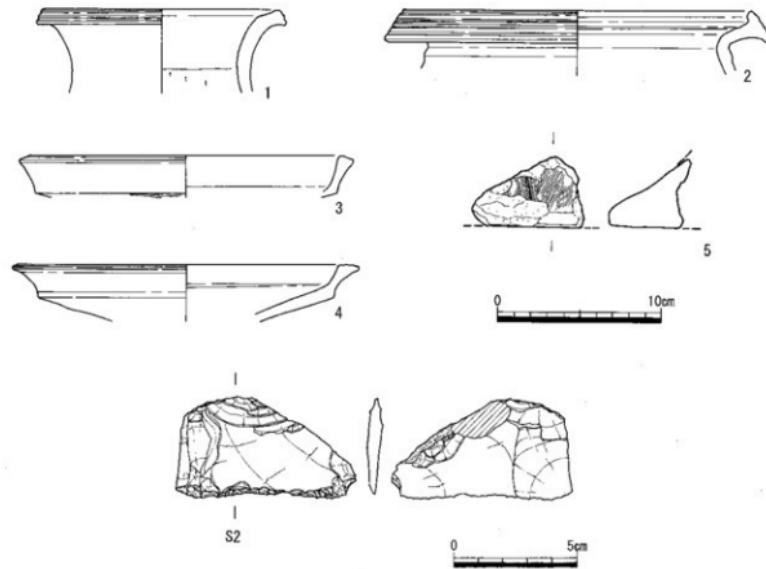


図31 醫王谷遺跡出土遺物 (S=1/2・1/3)
※S2のトーンは欠損を表す

第5章 まとめ

第1節 醫王谷古墳の位置づけ

1 立地の特徴

三井谷から大崎に広がる、足守川東岸の丘陵部には、多數の古墳が存在し、古墳群をいくつも形成している。そのうちいくつかの古墳は測量・発掘調査が実施されており、古墳時代前期から後期にいたる古墳の変遷が把握されている（小郷他1994 河田2006 草原1999）。一方、足守川上流域における発掘調査例はこれまでほとんどなく、内容について分からぬ点が多い。そのため、ここでは岡山市教育委員会が実施した分布調査の成果を参考にしながら、足守川上流域における後期古墳の分布の特徴について確認しておきたい。

醫王谷古墳の隣接地に、同時期の古墳は確認されていない。この日近川東岸においては、後期古墳がいくつか点在している。いずれも群集墳を形成することなく、醫王谷古墳と同様に独立墳としての性格が強いように思われる。このような後期古墳の立地傾向は日近川流域の特徴と考えられる。一方、足守川上流域では、栗井大塚古墳群をはじめとして後期古墳が密集して築かれる地域をいくつか確認できる（図2参照）。このように、両流域は後期古墳の分布において粗密がみられる。今の時点では検討できる資料に乏しいため、詳細は今後の調査を待たねばならない。

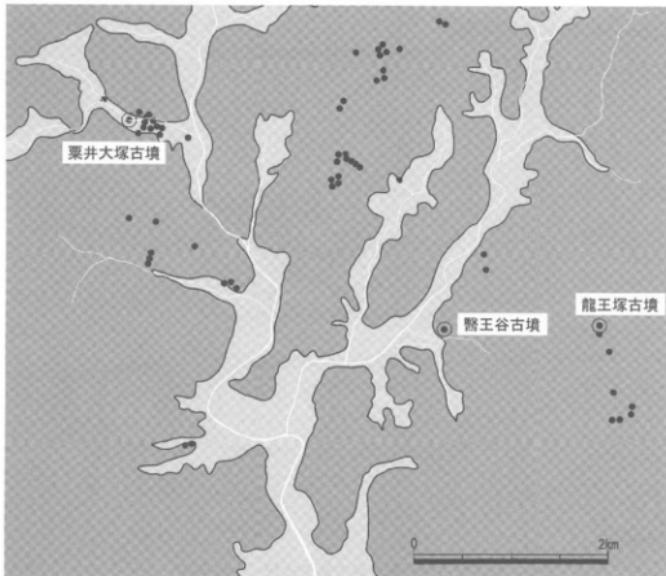


図32 足守川上流域の後期古墳分布図 ($\$=1/50000$)

2 墳丘と石室の構造

石室は現存で全長約8m、奥壁で幅約1.6m、高さ約2.2mを測る。奥壁は2石で構成され、その上は板状の小砾を充填している。天井石は2枚残存する。床面に玉砂利等を敷いた痕跡はみられず、地山を平坦に削平し床面としている。本来の開口部はすでに失われているため、袖の有無や正確な全長といった基本的なデータを欠く。石材は横位に積むのを基本とし、側壁に使用する2段目以上の石材のサイズに、違いがみられる。南壁は北壁の石材に比べて小型の石材を使用している。そのため南壁は6段程度で構成されるのに対し、北壁は3~4段で構成される。最上段は、両壁とも小砾を積むことによって高さを調整している。

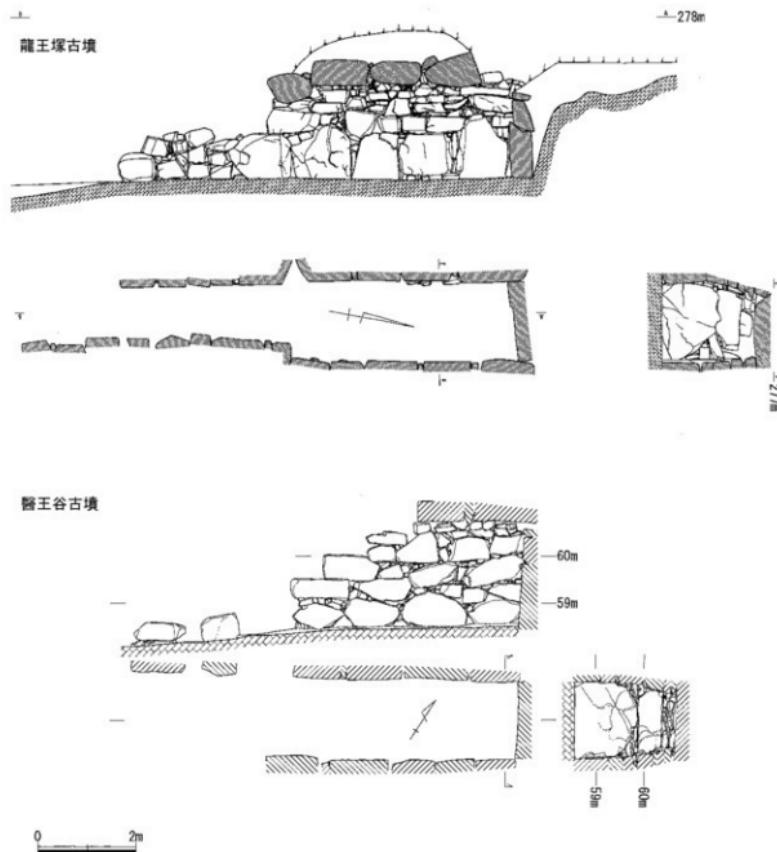


図33 龍王塚古墳と醫王谷古墳の比較 ($S=1/100$)
※龍王塚古墳は福田1984より引用一部改変

3 副葬品

副葬品は石室埋土を中心としながら、石室前面の中世・近世造成土から出土した。遺物は須恵器各種の他、耳環・馬具・刀子のほか緊結金具の鉄釘・鍵である。また、鍔が出土していることから鉄刀の存在が想定される。装飾品類は1点の耳環を除いて出土しなかった。副葬品の中で際だっているのが鉄鍔の本数である。発掘調査で出土したものは22本を数える。その内、平根式が14本を占めている。

4 龍王塚古墳との比較

龍王塚古墳は醫王谷古墳と同様当地域において発掘調査がされた数少ない古墳のひとつである。海拔292mをはかる丘陵の頂上付近に築かれた、径17mの円墳である。近隣に横穴式石室を主体部とする2基の円墳が築かれている。日近川へ至るには高度差が大きく、龍王塚古墳は東を流れる安部倉川との関わりがより深いものと考えられる。石室は全長約10mの片袖式で、玄室長約4.5m、羨道約5.5m、玄室の幅は奥壁付近で約1.6mを測る。墳丘・石室共に醫王谷古墳を上回る規模を誇る。副葬品は須恵器、鉄刀・刀子・鍔・刀装具・鉄鍔・馬具・鉄釘・釣針・勾玉・切子玉・耳環が出土している。勾玉・切子玉の装身具や釣針など一部特殊なものを除けば、両墳とも6世紀後半における横穴式石室墳の一般的な副葬品のあり方と理解できる。また両墳とも削り抜き式の石棺や装飾付太刀は確認されていない点は共通する。

5 被葬者像

発掘調査から人骨など被葬者に直接結びつく遺物は出土しなかった。しかし、出土した須恵器の型式差や、石室の規模から推定して、數度の追葬が想定される。そして副葬品に馬具や夥しい量の鉄鍔が含まれ、鉄刀の副葬が推定できることから、被葬者の中に武人的あるいは鉄生産と関わる人物の存在が考えられる。

醫王谷古墳が位置する大井郷は足守川西岸の奥坂遺跡群に代表される製鉄が盛んな賀夜郡阿蘇郷に隣接しており、平城宮木簡の「大井鍛十口」という記述や、天平11（739）年の「備中國大税負死亡人帳」の記録の中に大井郷の住人として東漢入部刀良人という渡来系と考えられる人物が確認できる（亀田2000）。渡来系の人々と鉄生産は切り離せない関係があり、これらの点から大井郷も鉄生産と深く関わっていたと思われる。

第2節 鋳造関連資料について

石室内からは古墳時代以降の遺物が多数出土している。その中の特筆すべき遺物として、鋳鉄鋳物生産に関連する鋳型・溶解炉・フィゴが挙げられる。県下で鋳造関連の遺物・遺構が確認された遺跡として、岡山市加茂政所遺跡（平井ほか1999）や総社市御所遺跡（武田2006）などで梵鐘鋳造遺構とそれに伴う鋳型・溶解炉片が出土している。時期は平安後期～中世と考えられている。醫王谷古墳の石室内から出土した鋳造関連の遺物からは銅津など青銅製品の鋳造を行った痕跡はみられなかった。鋳造関連遺構は確認することができなかつたものの、操業はそれほど離れていないところで行われていたのであろう。遺物は石室埋土から主に出土している。石室の埋土は中世土器のほか近世の遺物を含んでおり、操業の時期は中世～近世と推測される。出土した鋳型はいずれも外型である。鋳型は取

り壊して製品を取り出すため、全て破片で出土しており、全体形が復元できるものはない。

当地における鉄物師の活動を理解するにはまだ資料が十分とはいえない。ここでは中世・近世に医王谷古墳周辺において鉄製物の生産が行われていたことを確認しておきたい。

参考文献

- 小郷利幸他1994「足守地域史研究（2）」「古代吉備」第16集
草原孝典2000「吉備地方の古墳群－前・中期を中心に－」「季刊考古学」雄山閣
亀田修一2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」「福岡大学総合研究所報」第240号
武田恭彰2006「国府川改修工事に伴う発掘調査（1）」「総社市埋蔵文化財調査年報15（平成16年度）」
総社市教育委員会
平井泰男他編1999「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」「岡山県教育委員会
福田正継1984「龍王塚古墳」（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告58）岡山県教育委員会

表1 醫王谷古墳出土金属器觀察表

揭露番号	種別	器種	計測値(cm)			重量(g)
			最大長	最大幅	最大厚	
M 1	銅地鐵張	耳環	2.8	3.2	0.7	25.0
M 2	鉄器	鉄	3.5	3.8	2.5	4.3
M 3	鉄器	鍔?	13.4	2.4	0.9	30.5
M 4	鉄器	舟金具	8.7	2.9	0.2	15.6
M 5	鉄器	舟金具	4.4	2.9	0.2	6.1
M 6	鉄器	刀子	13.9	1.3	0.3	14.7
M 7	鉄器	刀子	8.6	1.4	0.4	10.7
M 8	鉄器	刀子	6.2	1.1	0.3	6.8
M 9	鉄器	鉄鍔	8.2	4.1	0.3	37.6
M10	鉄器	鉄鍔	4.4	3.0	0.5	13.4
M11	鉄器	鉄鍔	6.1	3.3	0.2	12.4
M12	鉄器	鉄鍔	4.5	1.9	0.4	7.7
M13	鉄器	鉄鍔	10.3	2.5	0.4	14.9
M14	鉄器	鉄鍔	7.1	2.4	0.2	11.7
M15	鉄器	鉄鍔	4.8	3.2	0.2	8.5
M16	鉄器	鉄鍔	4.8	3.2	0.2	10.9
M17	鉄器	鉄鍔	5.0	1.8	0.5	5.3
M18	鉄器	鉄鍔	3.6	1.1	0.6	5.3
M19	鉄器	鉄鍔	12.3	3.0	0.3	20.7
M20	鉄器	鉄鍔	8.3	3.0	0.4	18.0
M21	鉄器	鉄鍔	7.1	3.2	0.3	23.5
M22	鉄器	鉄鍔	6.3	2.1	0.2	12.5
M23	鉄器	鉄鍔	12.0	1.2	0.4	6.8
M24	鉄器	鉄鍔	8.2	0.6	0.3	5.0
M25	鉄器	鉄鍔	13.1	1.0	0.4	10.0
M26	鉄器	鉄鍔	9.2	1.2	0.3	7.0
M27	鉄器	鉄鍔	6.8	1.0	0.4	4.3
M28	鉄器	鉄鍔	3.9	0.7	0.2	1.4
M29	鉄器	鉄鍔	2.4	0.7	0.3	1.1
M30	鉄器	鉄鍔	8.0	1.0	0.3	4.7
M31	鉄器	鉄釘	15.9	1.5	1.0	55.8
M32	鉄器	鉄釘	6.3	1.5	0.5	10.5
M33	鉄器	鉄釘	4.0	1.1	0.5	6.0
M34	鉄器	鉄釘	3.6	1.1	0.6	17.1
M35	鉄器	鉄釘	8.5	1.2	0.4	11.4
M36	鉄器	鉄釘	8.5	0.9	0.5	9.2
M37	鉄器	鉄釘	9.5	1.0	0.3	13.4
M38	鉄器	鉄釘	10.1	0.9	0.5	12.5
M39	鉄器	鉄釘	9.9	0.9	0.3	12.3
M40	鉄器	鉄釘	5.1	1.6	0.3	6.8
M41	鉄器	鉄釘	8.7	1.0	0.6	11.9
M42	鉄器	鉄釘	3.7	0.7	0.6	4.4
M43	鉄器	鉄釘	5.3	0.6	0.3	3.7
M44	鉄器	鉄釘	3.6	0.5	0.3	2.5
M45	鉄器	鍔	5.8	2.9	0.5	9.7
M46	鉄器	鍔	7.9	1.8	0.6	7.8
M47	鉄器	鍔	9.2	2.6	0.6	9.6
M48	鉄器	鍔	3.2	6.7	0.7	9.7
M49	鉄器	鍔	3.9	1.7	0.4	3.1
M50	鉄器	鍔	5.6	2.0	0.7	9.3
M51	鉄器	鍔	1.0	2.6	0.5	1.6
M52	鉄器	鍔	3.3	3.3	0.4	5.1
M53	鉄器	鍔	3.6	2.2	0.4	3.2
M54	鉄器	鍔	0.7	4.2	0.3	3.4
M55	鉄器	不明	5.1	1.1	0.4	5.2
M56	鉄器	不明	7.0	1.2	0.2	4.7
M57	鉄器	不明	6.6	1.2	0.2	6.6
M58	鉄器	不明	6.0	1.1	0.3	6.7
M59	鉄器	不明	4.7	1.3	0.2	4.1
M60	鉄器	不明	3.7	1.9	0.1	2.5
M61	鉄器	不明	3.8	1.6	0.1	2.9
M62	鉄器	不明	3.3	4.9	0.2	6.6
M63	鉄器	不明	4.6	0.9	0.3	2.5
M64	鉄器	不明	2.9	3.2	0.3	6.3
M65	鉄器	不明	2.0	3.0	0.2	5.3

表2 醫王谷古墳出土土器観察表

掲載番号	出土場所	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	調整
1	近世造成土	杯蓋	残存高:5.0 口径:13.8	灰色	0.5~1mmの長石	良好	外圓天井部2/3へラケズリ、他はヨコナデ
2	石室流入土	杯蓋	器高:5.25 口径:14.1	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓天井部1/2へラケズリ、他はヨコナデ、内面天井部に不整方向のナデ
3	石室流入土	杯蓋	残存高:4.0 口径:14.2	灰色	0.5mmの長石	良好	外圓天井部1/2へラケズリ後ヨコナデ、 他はヨコナデ
4	中世造成土	杯蓋	残存高:4.3 口径:14.3	灰白色	0.5mmの長石・石英	良好	外圓天井部2/3へラケズリ後ヨコナデ、 他はヨコナデ、内面中央部付近に不整方向のナデ
5	石室流入土	杯蓋	器高:5.5 口径:13.6	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓天井部1/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央部不整方向のナデ
6	石室流入土	杯蓋	残存高:4.7 口径:13.8	灰白色	0.5mmの長石	良好	外圓天井部1/2へラケズリ、他はヨコナデ、 外面上に自然難
7	石室流入土	杯蓋	残存高:3.9 口径:13.8	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓天井部2/3へラケズリ後ヨコナデ、 他はヨコナデ
8	石室流入土	杯蓋	残存高:3.85 口径:14.5	外面:灰色 内面:灰白色	0.5mmの長石	良好	外圓天井部2/3へラケズリ後ヨコナデ、 他はヨコナデ
9	石室流入土	杯蓋	残存高:3.5 口径:11.0	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓天井部1/3へラケズリ後ヨコナデ、 他はヨコナデ
10	石室床付近	杯蓋	器高:3.2 口径:10.0	灰白色	0.5mmの長石	良好	外圓大井部1/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
11	中世造成土	杯身	器高:4.8 口径:12.6	外面:灰色 内面:灰白色	0.5mmの長石	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
12	石室流入土	杯身	器高:4.3 口径:11.8	外面:黄灰色 内面:灰色	0.5mmの長石・石英	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
13	中世造成土	杯身	残存高:4.5 口径:12.5	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
14	中世造成土	杯身	器高:4.35 口径:12.3	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
15	中世造成土	杯身	器高:5.15 口径:13.9	灰色	0.5~1mmの長石	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
16	石室流入土	杯身	器高:4.9 口径:12.2	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	外圓底部2/3へラケズリ、他はヨコナデ、 内面中央付近不整方向のナデ
17	石室流入土	杯身	残存高:2.7 口径:12.1	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ
18	中世造成土	杯身	器高:3.7 口径:9.9	灰黄色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ、内面中央付近不整 方向のナデ
19	中世造成土	高杯	残存高:4.25 口径:11.8	外面:灰色 内面:灰白色	0.5mmの長石	良好	内外面ヨコナデ
20	近世造成土	高杯	残存高:7.5 口径:8.7	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ
21	石室流入土	高杯	残存高:4.5 口径:8.8	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ
22	石室流入土	平瓶	器高:13.1 口径:4.7 肩部最大径:14.2	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ
23	石室床付近	平瓶	残存高:13.35 肩部最大径:17.0	灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ、外向に自然難
24	中世造成土	高台付榙	器高:12.5 口径:8.9 肩部最大径:10.3 高台径:9.3	灰白色	0.5~1mmの長石	良好	内外面ヨコナデ
25	石室床付近	壺	残存高:10.7 口径:11.8 肩部最大径:22.0	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ
26	石室流入土	壺	残存高:6.9 肩部最大径:12.6 高台径:9.3	外面:紫灰色 内面:灰白色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ、外圓底部にヘラケ ズリ
27	近世造成土	壺	残存高:3.8 口径:21.3	灰色	0.5~1mmの長石・ 石英	良好	内外面ヨコナデ、口縁部付近に自然 難

開闢番号	出土場所	種別	器種	計測値(cm)	色調	胎土	焼成	調整
28	墳丘盛土	弥生土器	甕	口径:18.3	内外面:橙色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	口縁部外面ヨコナデ
29	墳丘盛土	弥生土器	甕	底径:4.3	外面:にぶい褐色 内面:橙色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	底部外面ナデ、外面ハケ 内面ヘラケズリ
30	墳丘盛土	弥生土器	甕	底径:6.9	内外面:橙色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	底部に燒成後穿孔、内面 ヘラケズリ
31	墳丘盛土	弥生土器	甕	-	内外面:橙色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ
32	墳丘盛土	弥生土器	高杯	底径:13.6	内外面:橙色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヘラケズリ
33	墳丘盛土	弥生土器	高杯	底径:9.8	内外面:にぶい黄褐色	0.5mm程度の長石	良好	内外面ヘラケズリ
28	中臣造出土	土器器	甕	高径:28.5 口径:21.3 最大腹径:25.6	内外面:にぶい黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	口縁部外面ヨコナデ、 肩部外面ハケ、内面ヘラ ケズリ
29	石室流入土	埴輪	馬財?	-	内外面:橙色	0.5~2mmの長石 ・石英	良好	内外面ナデ
30	中臣造出土	土器器	高台付陶	残存高:5.6 口径:4.2	内外面:にぶい褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ、底部外 面指押え
32	中臣造出土	土器器	高台付陶	残存高:3.15 高台径:7.8	内外面:にぶい黄褐色 内面:浅黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ、底部外 面ヘラオコシ
31	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:6.6 口径:15.9 高台径:5.4	外面:にぶい黄褐色 内面:黒褐色	0.5mm程度の長石 ・石英	良好	口縁部外面ヨコナデ
35	中臣造出土	土器器	高台付陶	高径:15.2 口径:6.5	外面:浅黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ、底部外 面ヘラケズリ後ナデ
34	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:6.0 口径:16.0 高台径:7.5	外面:浅黄褐色 内面:灰白色	0.5~1mmの長石 ・石英・角閃石	良好	口縁部外面ヨコナデ、 底部外面ヘラケズリ
33	中臣造出土	土器器	高台付陶	高径:4.0 口径:15.6 高台径:8.8	外面:にぶい黄褐色 内面:灰褐色	0.5~1mmの長石 ・石英・黒雲母	良好	内外面ヨコナデ
36	中臣造出土	土器器	高台付陶	高径:5.6 口径:14.7 高台径:5.6	外面:浅黄色 内面:灰色	0.5~1mmの長石 ・石英・黒雲母	良好	口縁部外面ヨコナデ、 底部外表面指押さえ
37	石室流入土	土器器	高台付陶	残存高:2.7 高台径:5.6	内外面:灰白色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ナデ
38	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:4.3 口径:10.9 高台径:4.3	外面:灰白色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ
39	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:3.7 口径:11.3 高台径:4.3	外面:浅黄色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ
40	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:3.3 口径:10.6 高台径:3.7	外面:灰白色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ、底部外 面指押さえ
41	石室流入土	土器器	高台付陶	高径:3.4 口径:11.2 高台径:4.0	外面:にぶい黄褐色 内面:浅黄褐色	0.5mm程度の長石	良好	口縁部外面ヨコナデ、 底部外面指押さえ
42	石室流入土	土器器	高台付陶	残存高:3.2 口径:11.8	外面:浅黄色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	内外面ヨコナデ
43	石室流入土	土器器	小皿	高径:2.9 口径:9.7	外面:にぶい褐色 内面:にぶい黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英・黒雲母	良好	内外面ヨコナデ、底部外 面ヘラケズリ
44	中臣造出土	土器器	小皿	高径:1.8 口径:9.9	外面:にぶい黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英・金雲母	良好	内外面ヨコナデ、底部ヘ ラ切り後ナデ
45	石室流入土	土器器	小皿	高径:1.75 口径:9.6	外面:にぶい赤褐色 内面:明赤褐色	0.5~1mmの長石 ・石英・赤色土粒含む	良好	底部外表面ヘラケズリ後ナ デ
46	石室流入土	土器器	網	残存高:1.35 口径:24.8	外面:褐灰色 内面:にぶい黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	口縁部外面ヨコナデ、 肩部外面ハケ
47	石室流入土	土器器	網	残存高:2.00 口径:40.0	にぶい黄褐色	0.5~1mmの長石 ・石英	良好	口縁部外面ヨコナデ、 肩部外面ハケ
48	中臣造出土	中世陶器	鉢	残存高:1.52 口径:32.8	外面:灰白色 内面:灰オーリープ	0.5~2mmの長石	良好	内外面ヨコナデ
49	石室流入土	柒付	口唇	残存高:4.35 口径:6.8	-	-	良好	-
50	石室流入土	柒付	茶碗	高径:6.3 口径:12.0 高台径:4.5	-	-	良好	-
51	石室流入土	柒付	蓋	つまみ径:4.1	-	-	良好	-

表3 醫王谷遺跡出土土器観察表

掲載番号	出土場所	種別	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	調整
1	包含層	弥生土器	壺	口径：14.3 残存高：5.2	内外面：にぼい褐色	0.5mm程度の長石・石英・黒雲母	良好	口縁部内外面ヨコナデ
2	包含層	弥生土器	甕	口径：11.2 残存高：3.6	外面：褐色 内面：浅黄褐色	0.5~1mm程度の長石・石英	良好	口縁部内外面ヨコナデ
3	包含層	弥生土器	高杯	口径：19.1 残存高：2.5	内外面：褐色	0.5~1mm程度の長石・石英	良好	口縁部内外面ヨコナデ、赤色顔料付着
4	包含層	弥生土器	高杯	口径：20.2 残存高：3.5	外面：褐色 内面：淡赤褐色	0.5mm程度の長石・石英・赤色土粒	良好	口縁部内外面ヨコナデ
5	包含層	埴輪？	器財？	-	褐色	0.5~1mm程度の長石・石英	良好	ハケ、性はナデ

表4 醫王谷古墳・醫王谷遺跡出土石器観察表

掲載番号	出土場所	石材	器種	計測値(cm)			重量(g)
				最大長	最大幅	最大厚	
S1	墳丘盛土	サスカイト	打鍛石包丁	4.1	7.2	1.0	30.0
S2	P20	サスカイト	スクレイパー	4.1	7.3	0.5	21.8

1. 横穴式石室
完掘状況
(南東から)



2. 横穴式石室 正面
(南から)



3. 横穴式石室 奥壁

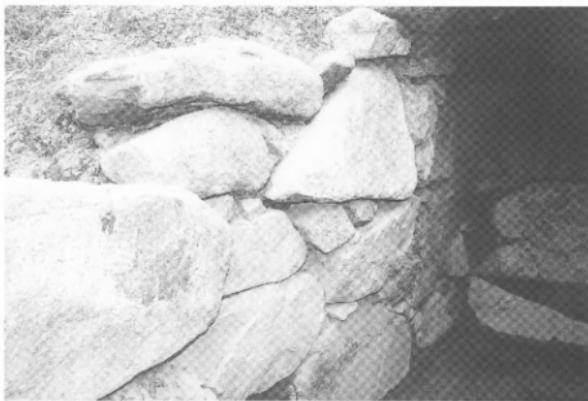


図版 2

醫王谷古墳



1. 横穴式石室 東壁



2. 横穴式石室 西壁



3. 横穴式石室
奥壁から開口部



1. 墓丘主軸断面
(北西から)



2. 墓丘東側断面
(南西から)



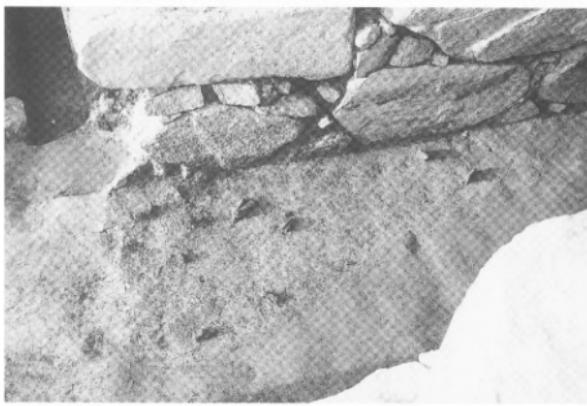
3. 墓丘西側断面
(南西から)

図版 4

醫王谷古墳



1. 墓丘残存状況
(南東から)



2. 石室内遺物出土状況
(南から)



3. 高田小見学

1. 調査区下段
完掘状況
(南から)



2. 調査区下段
地山検出状況
(北から)



3. 調査区上段
完掘状況
(東から)



図版6



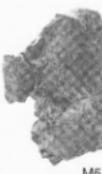
M1



M2



M3



M4



M5



M6



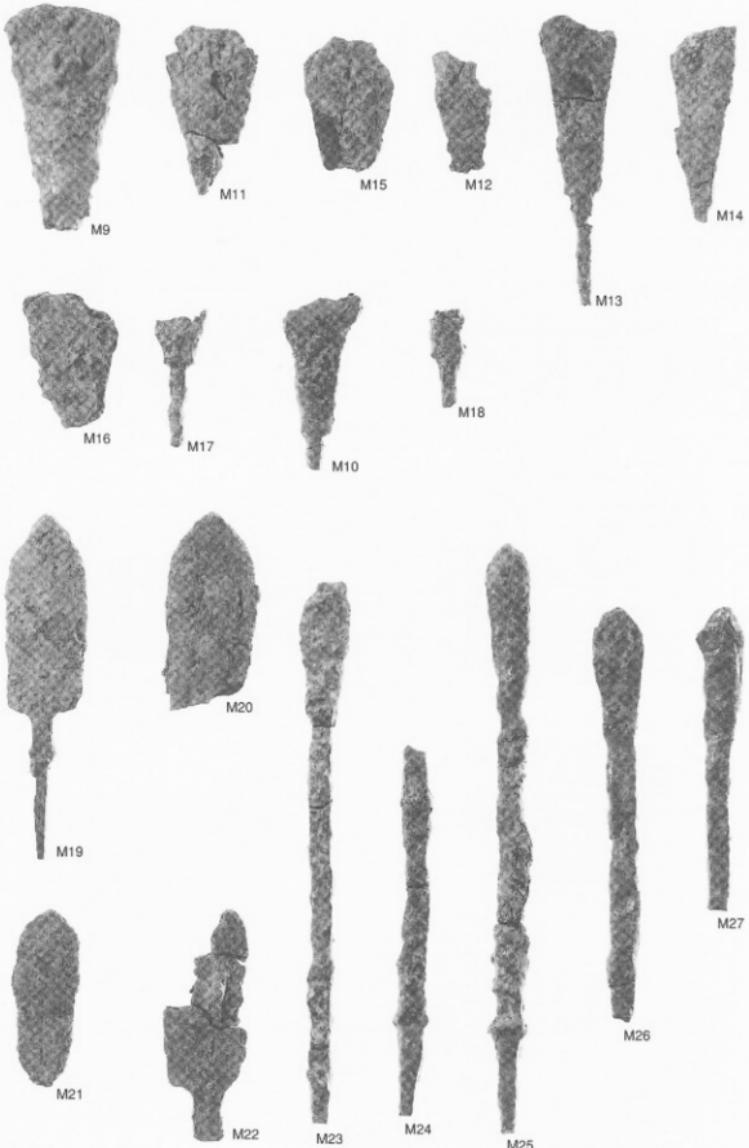
M7



M8

耳環・鉗・刀子・馬具

図版 7



鉄鎌

図版 8



3



10



2



16



11



12



14



18

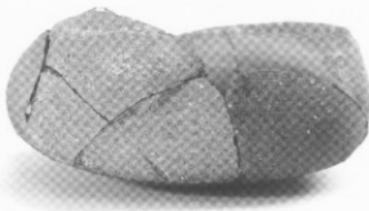


24

須恵器 1



20



26



22



23



25

須恵器 2

図版10



37



38



65



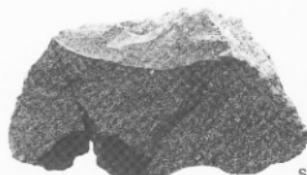
60



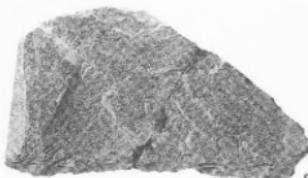
58



62



S1



S2

古墳時代以外の遺物

報告書抄録

ふりがな	いおうだにこふん・いおうだにいせき
書名	醫王谷古墳・醫王谷遺跡
副書名	農地等高度利用促進事業（圃場整備）に伴う発掘調査
編著者名	西田和浩
編集・発行機関	岡山市教育委員会 文化財課
所在地	〒700-8544 岡山市大供1丁目1番1号
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いおうだにこふん 醫王谷古墳	岡山県岡山市 日近1777番他	33201		34° 44' 57"	133° 49' 5"	2005.10.5~12.5		3000m ² 圃場整備
いおうだにいせき 醫王谷遺跡	同上	同上		同上	同上	同上		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
醫王谷古墳	古墳	古墳時代 中世	横穴式石室	金属製品 須恵器 鋳造関連遺物	全長8mの横穴 式石室墳
醫王谷遺跡	散布地	弥生時代	ピット	弥生土器・石器	

醫王谷古墳・醫王谷遺跡

-農地等高度利用促進事業(國場整備)に伴う発掘調査-

発行日 2008年3月31日

制作・編集 岡山市教育委員会文化財課

発行 岡山市教育委員会
岡山市大供1-1-1

印 刷 山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1